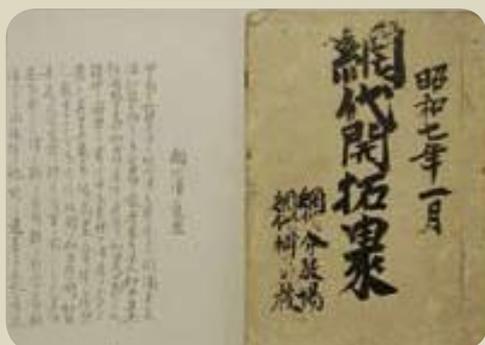


愛南町の文化財



網代開拓由来記



万福寺のイムマキ



平城貝塚出土土器



藤岡家住宅主屋



鹿島

愛南町教育委員会

は じ め に

町村合併にともない、愛南町が誕生して4年が経過し、このたび指定文化財の体系資料として「愛南町の文化財」を発刊するにいたりました。

愛南町には、「平城貝塚」に代表される遺跡や、有形・無形の文化財、風光明媚な自然に育まれた記念物が数多く存在しており、これらの文化財を、今後のまちづくりに欠かすことのできない貴重な資料として残し、伝えていかなければならないと考えております。

この「愛南町の文化財」が、多くの人々に活用され、文化の高揚の一助になれば幸いです。

なお、発刊にあたりご協力をいただきました関係各位並びに所有者の方々に、心より厚くお礼申し上げます。

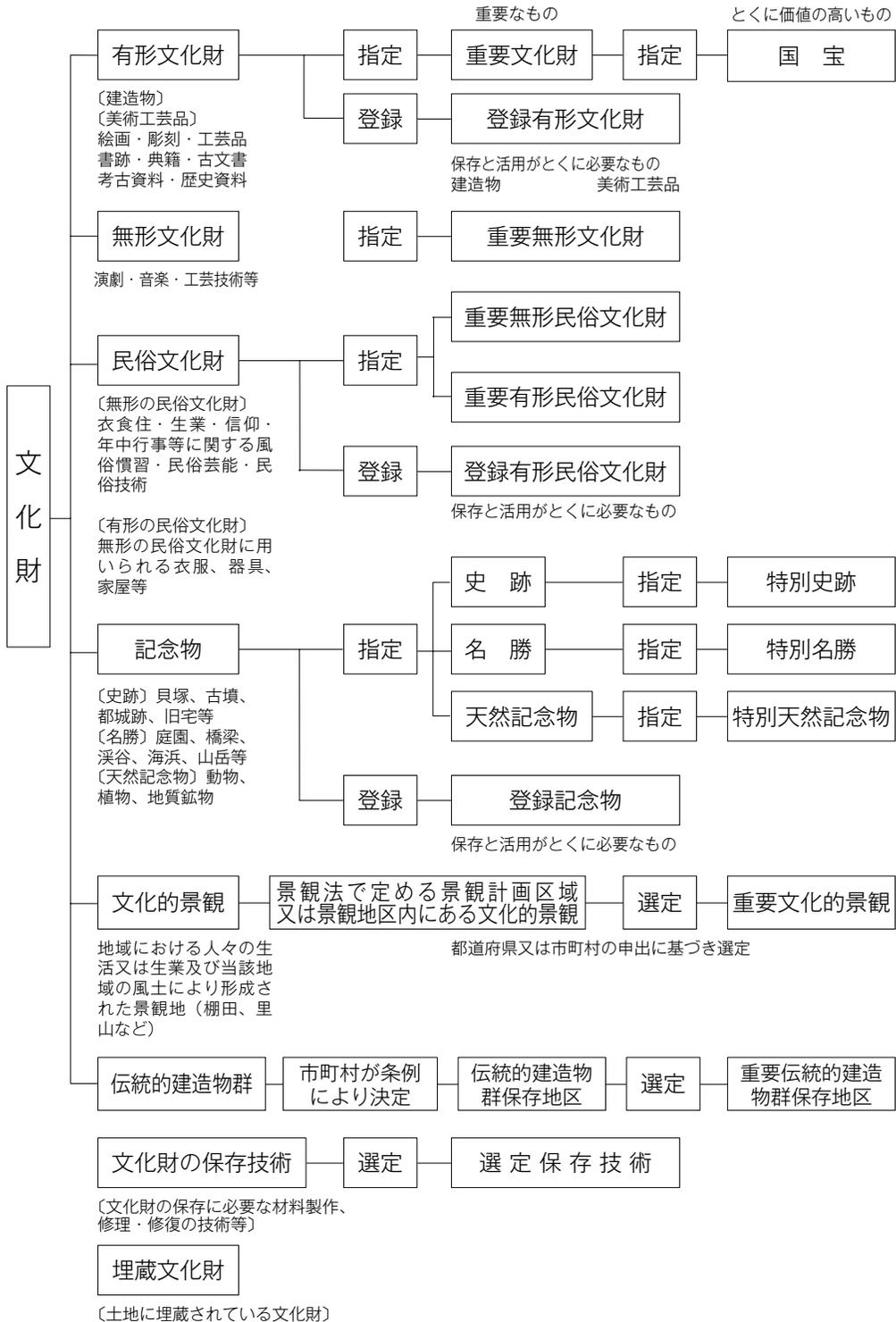
愛南町教育委員会

教育長 田 村 茂 雄

目 次

はじめに	城辺下組の唐獅子	
文化財のあらまし	貝塚五ツ鹿踊り	39
凡 例	鹿踊り	
国指定文化財	城辺上組八鹿踊り	
国選択文化財	僧都の伊勢踊り	40
国登録文化財	俵ねり	41
	ニホンカワウソ	1
	南予地方の牛の角突き習俗	2
	井村家住宅	3
	蕨岡家住宅主屋	4
	蕨岡家住宅長屋門	
	蕨岡家住宅土蔵	
県指定文化財	銅造誕生釈迦仏立像	5
	はなとりおどり(増田)	6
	正木の花とり踊り	
	久良の能山踊り	7
	平城貝塚	8
	高野長英築造の台場跡	9
	鹿 島	10
	宇和海特殊海中資源群	11
	大島の樹林	12
	万福寺のイヌマキ	13
町指定文化財	観自在寺山門	14
	安住寺五輪塔	15
	菊川石燈籠	16
	馬瀬常夜燈	17
	長崎常夜燈	
	豊田石造物群	18
	飛揚鯨之塚	19
	延命寺地藏菩薩像	20
	地藏庵地藏菩薩像	
	黒 仏	21
	十一面観音菩薩像	22
	常宝寺十一面観音立像	
	若宮神社狛犬一對	22
	予州篠山観世音寺鰐口	23
	有栖川宮熾仁親王染筆	23
	日光、月光菩薩像並びに十二神将像	24
	黄幡神社の絵馬	25
	奉納絵馬	
	網代開拓由来記	26
	城辺町内出土考古資料	27
	城辺小学校出土石器	28
	浦和家の棟札	28
	尾崎藤兵衛尉資料	29
	樽見英明学校印	30
	篠山絵図	30
	奉納歌額	31
	御荘焼資料	32
	御荘焼長月窯跡	
	御荘焼一木窯跡	
	御荘焼早崎窯跡	
	御荘焼豊田窯跡	
	和口若宮神社金幣	34
	チョウナづくりの家	35
	遍路版木	36
	城辺中組の唐獅子	38
	家串の荒獅子	
	城辺下組の唐獅子	
	貝塚五ツ鹿踊り	39
	鹿踊り	
	城辺上組八鹿踊り	
	僧都の伊勢踊り	40
	俵ねり	41
	中・外泊の祝唄	41
	福浦三番叟	42
	深泥遺跡	43
	和口西の駄場遺跡	43
	梶郷駄場遺跡	44
	天嶼の鼻遺跡	44
	八幡神社遺跡	45
	法華寺遺跡	46
	節崎遺跡	47
	三島岡遺跡	47
	常盤城跡	48
	大森城跡	
	緑城跡	
	緑の千人塚	50
	芭蕉句碑	50
	岡村松軒翁之墓所	51
	御荘三歌人岡原常嶋の墓	52
	御荘三歌人二神永世の墓	
	御荘三歌人二宮如水の墓	
	御荘焼陶祖久治兵衛の墓	54
	脇本の傍示婆	54
	僧都の一里塚	55
	天嶼の砲台場石塁	56
	松尾峠の境界石標	56
	小山御番所井戸	57
	長走りの滝	58
	天嶼の鼻	58
	脇本の浜	59
	篠山山頂自然林	60
	火打石	61
	柏崎岩神社境内巨木群	62
	八幡神社社叢	62
	老大木柏槇	63
	アコウの大木	64
	蘇 鉄	65
	赤松家の南天	66
	御荘室手の大南天	
	観音ツバキ	67
	能山様の大イチョウ	67
	久良の大クス	68
	戸たてずの楠	
	岩水のおガタマノキ	69
	イヌマキ	70
	ヤマモミジ	70
	ウバメガシ叢林	71
	文化財件数	72
	愛南町文化財指定一覧表	73
	文化財所在地	
	あとがき	

文化財のあらまし



凡 例

- 1 本書は、平成20年4月現在で愛南町内に所在する国、県及び町の指定・登録文化財111件を収録した。
- 2 掲載は国指定・国選択・国登録・県指定・町指定の順に、また配列は、基本的に文化財の種類に従い、有形文化財（建造物・石造美術・彫刻・工芸品・美術工芸品・典籍・考古資料・歴史資料）、民俗文化財（有形民俗文化財・無形民俗文化財）、記念物（史跡・名勝・天然記念物）の順に並べたが、いくつかの文化財は性質上、指定の異なるものをまとめて掲載した。
- 3 用字・用語は現代かなづかい、常用漢字を原則としたが、文化財の表現上やむをえないものについては例外とした。また、できるだけふりがなをつけた。
- 4 人名については、敬称を略した。

ニホンカワウソ

国指定 昭和39年6月27日

特 天 昭和40年5月12日

所在地 愛媛県・高知県

イタチ科に属する夜行性の肉食動物で、胴や尾が長く、短い足には「みずかき」がある。水中の動植物を主食とするため海岸にすむことが多い。成獣で頭胴長70cm程度、尾は長大で45cm前後、体重は5～10kg、寿命は10～20年といわれている。

かつては至る所に生息し、愛南町ではえんこうやかっぱ伝説のモデルになるほどなじみの深い動物であったが、毛皮獣として乱獲されたため激減している。開発などによる生息環境の破壊により、種の絶滅が危惧されている。愛媛県では、昭和39年5月10日に県獣に指定し保護している。



南予地方の牛の角突き習俗

国選択 平成7年11月8日

所在地 愛媛県南部

牛の突きあい（闘牛）は、わが国の伝統的な動物競技のひとつとして広く行われていたが、現在では岩手・越後・隠岐・徳之島・沖縄、そして本県の南予地方で行われているにすぎない。

南予地方の牛の突きあいの起源は御庄で、遅くとも江戸末期には行われており、現在の宇和島市・南宇和郡・北宇和郡で、土俵と呼ばれる闘牛場（駄場）が設けられ、祭礼や年間の様々な行事の際に盛んに行われてきた。

江戸時代以来たびたび禁止にあったが、1トン以上の巨体の突きあいは娯楽のない時代の農民にとって、大きな楽しみのひとつであった。

現在も宇和島市と愛南町（旧御荘町）で闘牛大会が行われているが、農業の機械化などにより、農業の生産手段として牛が使用されなくなるとともに、伝統的な飼育方法や、突きあい習俗、地域ごとに行われていた取り組みの実態など、牛の突きあいにかかわる伝承も失われようとしている。

平成7年11月、文化庁から国選択無形民俗文化財に選ばれた。



井村家住宅

国登録 平成15年3月18日

所在地 小山153番地

井村家住宅主屋は、昭和13年に旧小山^{わらびおか}蔵岡家の住宅として建てられたものである。集落東の山あいであり、南を正面とする。木造一部二階建てで建築面積は143㎡（43坪）で、中央玄関を境に、平屋で下屋根を廻した西半は座敷等を伝統的な和風でまとめ、1階に応接間や食堂を配した東半は縦長窓や緑色の屋根瓦などに洋風の意匠がうかがえる。昭和初期の地方建造物では貴重な和洋折衷住宅といえる。



蕨岡家住宅主屋 蕨岡家住宅長屋門 蕨岡家住宅土蔵

国登録 平成15年 3月18日

所在地 正木1465番地

別家^{わらびおか}蕨岡家住宅主屋は、明治33年頃に建てられ、敷地のほぼ中央に位置し、東を正面とする木造二階建平入で、背面に角屋を延ばす造りとなっており、建築面積は228㎡(69坪)である。^{さんかわら}棧瓦葺の屋根は南が入母屋造、北が切妻造になり、東と南には下屋根を廻す。建物全体に良材を用いた丁寧なつくりであり内外の木部に^{べんがら}弁柄塗を施すなど工夫がみられ、当地方の近代和風建築の好例といえる。

長屋門は桁行約26mあり、木造、平屋建、南北棟の切妻造^{ささらこしたみ}棧瓦葺で、中央を門構えとする。外壁は、腰上を真壁造と漆喰大壁、腰は^{なまこかべ}簾子下見板張と縦板張を巧みに組み合わせ、変化のある構成としている。

土蔵は、主屋の南側に位置し、土蔵造二階建で、南北棟の切妻造^{ひさし}棧瓦葺で置屋根形式になる。北面は1階中央に^{なまこかべ}庇付きの戸口、2階には縦格子入の窓を設ける。外壁は漆喰塗であるが腰は海鼠壁とし、その境に水切瓦をつけるなど丁寧なつくりで、保存状態も良好である。



主 屋



長屋門



土 蔵

銅造誕生釈迦仏立像（彫刻）

県指定 昭和40年3月29日

所在地 御荘平城1531番地

この像は、昭和10年ごろ、平城の山王社（法華寺）付近から出土し、白鳳時代7世紀の作品と確認されている。

像高11.1cmで、上方にあげる右手の大半を失い、両足は裳の下方の一部を残して欠失しているが、現存する彫刻面は、製作時の形をよく伝えている。

頭髮は、螺髪を無文のままとし、頭部は体軀にくらべ、かなり大きく、目鼻立ちは、タガネを入れてはっきりと刻み、仰月形の口元は古式の微笑をうかべるかに見える。

体はかなり細身で、よく引き締まっており、裳はその上端を紐でくくり結び目を立てている。細身の体にふさわしく鬘を直線的に簡明にあらわし、光背用の柄が大きいなど古い形を残している。



はなとりおどり〔増田〕（国選択無形民俗文化財） 正木の花とり踊り

国選択 昭和47年8月5日（増田）
県指定 昭和40年4月2日（増田）
指定替 昭和52年1月11日（増田）
県指定 平成12年4月18日（正木）
所在地 増田2648番地（増田）
所在地 正木1468番地外（正木）

花取り踊りは、南予の一部と土佐一円に踊られており、発祥は土佐であろうが、最も古い形を残しているのは正木の花とり踊りである。

花取り踊りは、修験道の山伏芸能のひとつで、鉦を叩く行為や歌詞から念仏踊りが取り入れられたことが分かる。

また踊りの由来は、花賀という賊や、花賀城主の霊を慰める。あるいは敵将の鼻を切り取ったなどがあるが、これはハナトリの語呂合わせで、神仏に供える花、シキミ、サカキ、ツツジ、シャクナゲ等を取る意味である。

はなとりおどり（増田）の^{さいはら}斎払いは、本山派（天台系）と当山派（真言系）の争いを表し、青竹の打ち合いは、土佐の神事「棒打ち」の影響がみられる。踊りの刀は破邪の剣、平常嫌う逆さ鎌は破魔除災を表している。旧暦の7月11日安養寺境内で、麻の藍染の着流しにたすきを掛け、八十八部の帽子様の鉢巻で踊る。

正木の花とり踊りは、旧暦10月18日篠山（現在は歡喜光寺権現堂）、歡喜光寺境内及び旧庄屋蕨岡家で、雪輪笹紋の袖無上衣に^{たっつけばかま}裁着袴、赤い鉢巻で踊る。

いずれも真剣を使うので、7日間の^{みずごり}水垢離で身を清めて踊る。



はなとりおどり



正木の花とり踊り

久良の能山踊り

県指定 平成17年12月27日

所在地 久良1446番地

能山踊りは、久良真浦の古木庵に祀^{まつ}られている、顕徳院殿能山祐賢大居士（御庄領主^{かじゅじさまのかみもとかた}勸修寺左馬頭基賢）の霊を慰めるため踊りはじめたと伝えられている。

毎年8月1日から14日の盆の宵まで踊られる。

昔は鉦も使われていたが、現在は太鼓のみとなっており、太鼓打ちを中心に、長着（着流し）を着た10人位の男性が、扇を持ち、自分で歌いながら、ゆるやかな動作で踊る。

伊予出身の一遍上人の広めた踊り念仏の一種で、戦前は各地で踊られていたが、現在県下では2、3地区で踊られるのみとなっている。

念仏踊りは、歌が主で踊りは従であるため、扇に書いた歌詞を見て、自分で歌いながらゆっくりした動作で踊るので、能の影響を受けているという説もあるが、関係はない。

昔は48庭（あるいは12庭）あったというが、現在は、8庭33歌が残っている。また歌い継がれるうちに意味をなさなくなったものや、それぞれの時代のはやり歌（小歌）を取り入れたものもある。

ろくじ踊りは、南無阿弥陀仏の6字を歌うところからきており、歌詞は次のとおりである。

○イヨなむあみだ、アアなむあみだ、イヨ仏のみ名をとなうれば、これぞ極楽浄土なり。

○ふたつなき、この世はかりの宿なれば、ただひと筋に願いたのめよ。

※庭は段ともいい、踊りを数える単位



平 城 貝 塚

県指定 昭和26年11月27日

所在地 御荘平城2069番地1外

平城貝塚は、愛南町中央部を流れ、御荘湾に注ぐ僧都川の右岸、平城地区にあり、明治24年、宿毛貝塚と同時に、高知県の寺石正路^{てらいしまさみち}によって発見されたものである。

この貝塚は、「平城式土器」という「標式土器」で全国的に知られた、3500年前の縄文後期中葉の遺跡であり、昭和29年より現在まで、5回の発掘調査が行われている。

土器の外には、完全体を含む多くの人骨と、石器・骨角器・獣骨・魚骨・植物種子など、多くの出土物があり、その中でも珍しいものとして、全国でも出土数の少ない織物片や、貝笛（装身具説もあり）がある。また、住居跡ではないかと考えられる遺構も発見されている。

この貝塚は、貝層約1 m、南北約90 m、東西約60 mあり、多量の遺物と、中国・九州地方との関連を考えるうえで重要な遺跡である。



石 碑



貝笛と貝輪



平城式土器

高野長英築造の台場跡

県指定 昭和25年10月10日

所在地 久良4477番地外

深浦湾の南西端に突き出た天巖鼻の断崖上に、高野長英の設計にかかる砲台（台場）跡がある。海面から約20mの小台地であって、広さ33 aの平坦地に、高さ1～1.5mの石塁を築き、大砲2門を構えていたようである。

幕末、各藩は海岸防備のため、要害の地に砲台を築造した。藩軍備の近代化に取り組んでいた宇和島藩第8代藩主伊達宗城^{だてむねなり}は、蘭学書の翻訳と軍事研究のため高野長英を招いた。長英は名を伊藤瑞溪に変え、オランダ兵学研究、翻訳、著作にたずさわ^{ほうかひつどく}り、『砲家必読』^{さんべいたくちき}『三兵答久知機』^{ちひいちじょ}『知彼一助』等の翻訳を行うとともに、藩の求めに応じてこの砲台の設計をおこなった。長英は嘉永2年（1849）、わずか1年あまりで宇和島を去るが、砲台は同3年5月頃完成した。当初は2門のシャクリウチ砲（火縄使用）であったが、後に^{がかん}鴛管（雷管）打ち砲に改良された。

平成元年（1989）11月、宇和島伊達事務所で、長英自筆の「砲場土図」や「久良砲台絵図」など多数の砲台場関係資料が発見された。それによると、試射の結果、10発中9発が標的近くに命中しており、優秀な砲台であったことが分かった。



56ページ町指定史跡「天巖の砲台場石塁」と関連

鹿 島

県指定 昭和30年11月4日

所在地 鹿島1番地外

西海半島西先端の西方500mに浮かぶ周囲6km、面積1.3km²の鹿島は、江戸時代には宇和島伊達藩の狩猟場であったことなどから自然がよく保存されており、陸域・海域併せて足摺宇和海国立公園に指定されている。

鹿島は黒潮分流の影響を強く受け、陸域ではホウライシダ、ケホシダ、オオバライチゴ、リュウキュウバライチゴ、モロコシソウなどの亜熱帯的な要素の強い植物や、希少なニッポンタチバナ、ケナシアオギリ・タブノキ・ホルトノキ群落等が植物地理学上重要視されている。また高知県沖の島と西海半島、由良半島にしか自生しないオキノシマテンナンショウやムサシアブミ・ナンゴクウラシマソウなどシカが食べない植物が多くみられることも異色である。

キュウシュウジカとニホンザルのように通年見られる動物のほか、天然記念物のカラスバトも立ち寄り、初夏のヒメボタルの大量発生も見ものである。

その他に、鹿島洞・三日月洞といった壮大な海食洞があるのも特色のひとつである。

海域では、イシサンゴ類、ウミトサカ類と熱帯魚が織りなす海のお花畑を楽しむことができ、海水浴やキャンプにも最適である。



宇和海特殊海中資源群

県指定 昭和40年4月2日

所在地 愛南町外

南予海岸の由良半島から旧城辺にいたる海岸地生の生物群のうち、海岸動物類（腔腸動物・棘皮動物）、貝類、海藻類が天然記念物として指定されたものである。

宇和海特殊海中資源群の区域の中で、西海鹿島地域では、ソラスズメダイやチョウチョウウオといった亜熱帯性魚類が確認でき、エンタクミドリイシの群落に代表されるイシサンゴ類などのハードコーラル（造礁サンゴ）だけでなく、ソフトコーラル（柔らかな群体を作る軟質サンゴ）であるウミトサカ類、特にパステルカラーの華やかなキバナトサカの密生が特徴である。

しかし、近年大型台風の直撃や、オニヒトデ、ヒメシロレイシガイダマシの大量発生により、危機に瀕しているが、懸命な保護活動を続け、現在再生の過程にある。



大島の樹林

県指定 昭和32年12月14日
所在地 御荘平山1796番地1外

御荘湾にある大島は、周囲650m、海拔25m、面積約1.4haの小さい島である。

この島には、温帯性及び亜熱帯性植物が自然のままで生い茂り、島全体が一群の照葉樹林を形成しており、植物の種類は約200種にも及ぶ。

スタジイがもっとも多く、アコウ、ホルトノキ、ヤマモガシ、ハマビワ、ミズバイ、タブノキなどがあり、密林をなしている。樹下にはマツバラシ、フウトウカズラなど珍しい植物も存在する。その他、つる性植物にはツタ、サカキカズラ、ムベなどが樹間を縫っている。

南予地方に残された数少ない自然林であり、御荘湾内に美しい景観をそえている。



万福寺のイヌマキ

県指定 昭和59年1月10日

所在地 深浦385番地

深浦の万福寺の境内に、門柱のように2本並んでいるのがイヌマキである。イヌマキとは、昔、杉をマキといったので、それと区分してイヌマキと呼んだものという。マキ、ホンマキともいい、垣根や庭木に植えることが多い。

外から見て、右が根回り5.1m目通り4.4m。左は根回り4.6m目通りの方が太く5.3mもある。樹高はいずれも20m位で、県下でも有数のイヌマキである。

また万福寺にはこのイヌマキに関して、「敦盛の新開家初代紋平が、サギッ
タ街道より苗を当寺に移植した」という碑が建立されている。碑の年代から計算すると樹齢は130年余りにしかならないが、専門家によると300年以上は経っているのではないかと推定された。



観自在寺山門(建造物)

町指定 昭和51年10月1日

所在地 御荘平城2253番地1

観自在寺は、四国八十八ヵ所の第四十番札所で、真言宗大覚寺派の寺院である。

現在の山門（三門）は、明治43年観自在寺が焼失した後、馬瀬部落の大工山下又良が大病全快のお礼として、明治44年建立した。総檜造で、高さ7 m、幅6 m、屋根は、入母屋に蓑子造りで千鳥破風、化粧軒は二軒、垂木は枝割で間合は、極めて狭く、美しさと重量感がある（昭和63年に大修理を行った）。

また様式も正しく、^{かえるまた} 蓑^き 股^{ばな}、^{ときょう} 斗^{おたるき} 栱^きや^{おたるき} 尾垂木の組合せも見事な技術といえる。

元来三門とは、^{さん} 解^げ 脱^{だつ} 門^{もん}のことである。迷いから解放を願う者が必ず通らねばならぬ三つの門、^{くうもん} 空門・^む 相^{そう} 門^{もん}・^む 作^さ 門^{もん}のことである。寺院は山に建てられるので同音の山門と混同されている。一度この門をくぐる者は、一切の罪障を消滅し、無量の^く 功^{どく} 徳^{とく}を受けることができると説かれていることによるといわれる。



安住寺五輪塔 (石造美術)

町指定 昭和45年7月14日

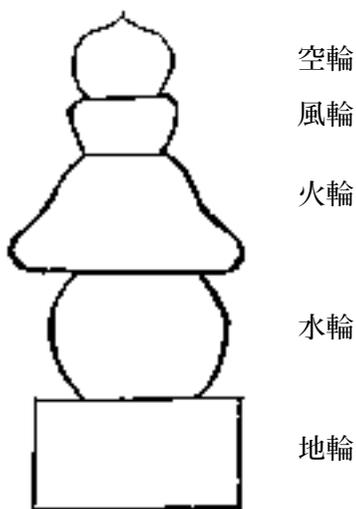
所在地 御荘長月3026番地

長月にある^{あんじゅうじ}安住寺の墓地の五輪塔は、町内では最大級で、五輪塔として整っており、類例をみない見事さである。

石質は^{かこうがん}花崗岩で、高さ2m、地・水・火・風・空の五大をあらわす様式が完全で、破損らしい箇所もない。しかも東西南北の碑面には、^{ぼんじ}梵字が彫られ、地輪には法名を中心^{しゅつじ}に右端上部にその出自がみられ、左端には施主の名を留め、建立の年記までそろった典型的なものである。

碑文には法名「^{げっせいみょうえんしんにょ}月清妙円信女」とあり、^{わらびおか}蕨岡元次郎の娘、寛文2年9月22日遠山左兵衛藤原信成が供養主として、この塔を建立したとある。

町内に出土しない花崗岩を使用した墓石は、御庄領主の姫君のものとの伝説をうんでいる。



五輪塔の図



菊川石燈籠（石造美術）

町指定 昭和58年12月9日

所在地 御荘菊川1107番地1付近

現在国道56号線沿いに祀^{まつ}られている巖^{いづくしま}島神社が、梶屋にあった頃の文政3年（1820）8月、菊川地区の若者中により、石燈籠^{いしどうろう}2基が奉納されて、当時の街道であった場所に建立され、今日まで保存されてきた。

石質は砂岩で地元から出る石材を使い、切り出した石をあまり加工せずに大胆に組みあわせている。

地上寸法は高さ2.3m、最大幅1.4m、立ち上がりの竿部の最大幅0.7mである。

元来この火袋^{ひぶくろ}は木製であったが、現在は石製のものに取り替えられている。そのため燈籠としては、非常に不均衡であるものの、その形状からは武骨でたくましさを感じられる。



馬瀬常夜燈 (石造美術)

長崎常夜燈 (石造美術)

町指定 昭和58年12月9日 (馬瀬・長崎)
所在地 御莊平城5540番地 (馬瀬)
御莊平城700番地3 (長崎)

馬瀬常夜燈^{じょうやとう}は、御莊湾に注ぐ蓮乗寺川河口の馬瀬地区に建っている。高さは、台座から頂部まで2.5m、正面に「奉燈」左側に「常夜燈」、右側は風化が激しく判読が困難ではあるが、「安政庚申正月」と記されているようである。

長崎常夜燈は馬瀬と同じ御影石を使い建立時期、外形、寸法ともよくにているが、こちらの方がわずかに大きく、形も優美である。建立は「安政五年八月吉日」と記され、干拓工事完成記念と船の安全航行のために造られたといわれる。

当時は、陸路の交通がきわめて悪く、輸送手段は海路に頼るほかなく、船が唯一のものであった。馬瀬は安政年間以降、御庄組の物資の流通拠点として、その役割を担っていたと考えられる。一方長崎は江戸末期、岩松の豪商小西家が宇和島藩より御莊湾の一部干拓の許可を得て、長崎地区に堤防や水門、遊水池など整備し、広い水田を開拓したことがはじまりである。現在も小西新田と呼ばれている。これにより長崎は御莊の海の玄関として栄え、商港として発展した。

両常夜燈とも宝珠^{ほうじゆ}と火袋^{ひぶくろ}が失われていたが、現在は新しいものが取り付けられている。



長崎常夜燈



馬瀬常夜燈

豊田石造物群（石像美術）

町指定 平成16年9月30日

所在地 城辺甲5005番地1

豊田の惣五郎神社下にある全国でも類例のない、仏教関係の4基の石造物である。

1. 四如来碑は、正面に「本師^{しゃかむにょらい}釈迦牟尼如来」右面に「南無薬師如来」左面に「南無阿^{あみだ}弥陀如来」裏面は「南無大日如来」とあり元禄7年（1694）建立しており、珍しい300年以上前の石造物である。豊田集落を^{しゃかだば}釈迦駄場といったのはこの碑に由来する。

2. 四如来像は、四如来碑にあわせて近代になって作ったものである。釈迦・薬師・阿弥陀・大日の四仏の組み合わせは例がなく、像の構成もアンバランスである。

3. 烏^う八^{はっ}臼^{きゅう}碑と呼ぶべきものがあり、「八臼烏^{ほんじ}本地大師」と彫ってある。ウハッキュウは曹洞宗の墓にのみ見られるものであり、単独の碑に彫った例はない。慶長2年（1597）とあり400年以上前のものである。

4. 大乘妙典六拾六部碑であり、碑の上部の円にバク（釈迦）の^{ほんじ}梵字を入れている。全国66の社寺に写経を納めた六拾六部（僧のち俗人も）が記念に建てたものであろう。

風化等の事由により、各碑の文字が分かりにくくなっているので、保存対策をたてる必要がある。

なお、近くには徳右エ門とひぜん五島政吉のへんろ道するべ石がある。



四如来像



烏八臼碑



飛揚鯨之塚（石像美術）

町指定 昭和51年11月3日

所在地 内泊1192番地

明治15年4月29日、内泊^{めろ}女呂の海岸に長さ7間（約13m）余りの大鯨が飛びあがって人々を驚かせた。当時、内泊^{かんせい}観成小学校は新築中で、校長は^{きずい}奇瑞であると人々を諭し、浦人はそれを信じ、塚を建立した。

後年さらに、1頭が内泊の東の大浜に飛びあがったのでやや小さい鯨の塚を建立した。

この2基の塚は、最初は寺院の庭に建立されていたが、後に現在地に移設した。



延命寺地藏菩薩像 (彫刻) 地蔵庵地藏菩薩像 (彫刻)

町指定 昭和35年 5月 7日 (延命寺)
昭和40年 4月17日 (地蔵庵)
所在地 御荘平山547番地 (延命寺)
高畑495番地 (地蔵庵)

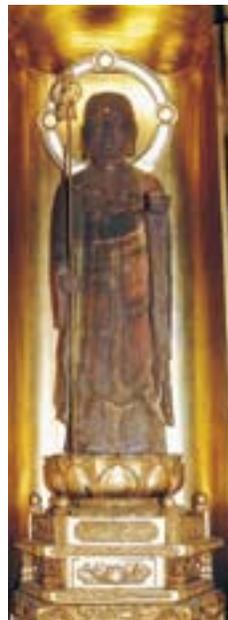
天保6年(1835)延命寺由緒によると、寛永13年(1636)休譽良説和尚が四国巡錫の途中、延命地藏尊の霊夢により堂宇を建立し、海立山延命寺地藏院と号した。当初延命地藏尊を本尊としていたが、後に阿弥陀如来を本尊とし、地藏菩薩像は秘仏として尊信されている。

延命寺の地藏は檜の寄木造で、像高86cm肩幅36.7cmでかなり深い刀法が見られる。玉眼嵌入の手法をとり、わずかに微笑した口元、新月を思わせるような眉など整った仏顔が美しい。専門家の鑑定では鎌倉期の作とされ、地方の地藏菩薩像としては傑作である。

地蔵庵(延命山地蔵寺)の本尊子安地藏像は、像高60cmの立像で、一木造、粗彫で、目は大きく見開いた形になっている。現在は黒色で、形よく整い品位がある。専門家の鑑定では、江戸初期の作であるといわれている。

地区の言い伝えによると、嵐のあとで、高畑の地藏ヶ浦に打ち寄せられた地藏を背負い、隣の赤水地区に運ぼうとしたが、急に重くなり動けなくなった。そこで村人たちは、「このお地藏さまは、高畑が好きなのだろう」と考えて、現在の場所に祀ったものといわれている。

地蔵庵の地藏も、延命寺同様秘仏とされ、延命寺は30年に一度、地蔵庵は60年に一度開帳される。



延命寺地藏菩薩像



地蔵庵地藏菩薩像

黒 仏（阿弥陀如来像・観世音菩薩像）（彫刻）

町指定 昭和39年9月10日

所在地 蓮乗寺44番地

天正年間、土佐長宗我部軍の侵入による戦いによって焼けたといわれる蓮乗寺の仏像は、秘仏とされ、一時深浦の正覚寺（今の西光寺）に置かれていた。

ススが付いたのか、何かを塗ったのか、黒く色は着いているが、焼けた跡ではない。

専門家の鑑定では、江戸初期以前の地方仏師の作といわれている。

1体は、童顔の素朴な「阿弥陀如来」の座像で59.5cmの一木造の仏像である。

別の1体は稚拙な素人彫で、「観世音菩薩」とされていたが、腹部に何かを取り除いた跡があり、潜（隠）れキリシタンの「マリア観音」ではないかという説もある。

御庄領主が、キリシタン大名である土佐一条兼定の家臣であったため、キリシタン遺物が存在しても不思議ではないと思われる。



阿弥陀如来像



観世音菩薩像

町指定有形文化財

十一面観音菩薩像（工芸品）

常宝寺十一面観音立像（美術工芸品）

町指定 昭和44年 7月11日（興禅寺）
昭和51年 3月26日（常宝寺）
所在地 御荘平城1153番地（興禅寺）
中川1716番地（常宝寺）

貝塚にある興禅寺の本尊である十一面観音菩薩像は、台座高33cmの正六角形で、像高96cmの金銅製の立像である。

常宝寺十一面観音立像は、像高70cmの木製立像で光背に金箔が施してある。作成年月日は不詳であるが、様式は古く、専門家の説では鎌倉時代の作といわれている。

一切の衆生のあらゆる苦難を救済するため、その請願の内容により33種に姿を変えて現れるという観音菩薩像は、奈良時代から江戸時代まで庶民の信仰を集め、盛んに制作されてきた。

この観音菩薩像は天冠台の上に10の仏をかたどり、前3面の仏は慈悲の相を表し、左3面は怒の相、右3面は笑いの相となっている。



十一面観音菩薩像



常宝寺十一面観音立像

若宮神社狛犬一對（工芸品）

町指定 昭和56年 5月26日
所在地 中浦1565番地

中浦の若宮神社に奉納されている焼物製の狛犬である。高さ80cm横幅35cm、前後幅60cm、双方ともに前足部分が10cmほど失われている。

製作は江戸期と思われるが、詳細は不明である。長い間、戸外に置かれていたため、かなり傷みがみられる。体は酸化銅を使った釉薬により深い緑色に、たてがみと尾は酸化鉄の釉薬で黄茶色に色付けされていて、釉薬も鉛白を主に使ったものと思われる。

像の造りが肉厚であることと、焼成温度が低いことにより像の内部の粘土は焼きしまっていない。

狛犬の阿吽の表情や、体躯の筋肉の盛り上がり、たてがみや尾など、その造りは細かく丁寧である。陶製の狛犬は珍しい。



予州篠山観世音寺鰐口（美術工芸品）

町指定 昭和51年3月26日

所在地 正木1468番地

「与州御庄篠山観世音寺鰐口寛正七年丙戌潤二月十八日宗諡置之」という刻銘があるこの鰐口は径約20cm、厚さ約8.6cmの銅製であり一対のものであったらしい。他の一つのものには、「与州御庄之篠大権現宝前寛正七年閏二月十八日宗諡置之」とあり径約26cm、厚さ約7cmの銅製であった。

元禄10年（1697）2月篠山権現再興の際、宇和島藩に引揚げられたもので、今伊達家にありと宇和旧記にしろされている。寛正7年（1466）は、室町時代の末期にあたり、篠山権現の歴史を物語る貴重な史料である。



有栖川宮熾仁親王染筆（美術工芸品）

町指定 昭和51年3月26日

所在地 増田5466番地

（一本松郷土資料館蔵）

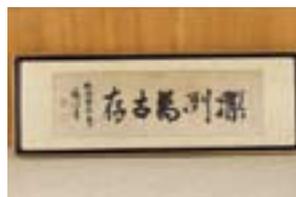
本書は、ありす がわのみやたるひとしんのう有栖川宮熾仁親王の作である。

有栖川宮熾仁親王は、天保6年（1835）2月19日、宮家の名門有栖川宮^{たかひと}熾仁親王の第一王子として京都に生まれる。

明治元年の戊辰戦争では官軍の東征大総督として江戸城を接收しており、維新後は、明治3年に兵部卿、明治4年に福岡藩知事（のち県知事）に就任した。その後、元老院議官・議長等の官職を歴任し、陸軍大将となる。

明治27年に起こった日清戦争では、総司令官として広島大本営に赴くが、翌明治28年61歳で死去した。

この横額は「凛冽萬古存 明治癸未春日 熾仁書」とある。昭和15年東京泰東書道院展覧会で、熾仁親王の書と折紙をつけられたものである。



日光、月光菩薩像並びに十二神将像（美術工芸品）

町指定 平成3年3月26日

所在地 広見2466番地

熊野大社に仕えていた地区の旧家に伝わるものであったが、明治末頃広見地区に寄進され薬師堂に祀られた。江戸中期を下らない製作と考えられる。

仏教における薬師如来の脇侍として、日光菩薩は左脇に、月光菩薩は右脇に侍し、薬師三尊を構成している。

また十二神将は、仏教の信仰の対象である天部で、また護法善神である。薬師如来の12の大願に応じて、昼夜の12刻を保護するといひ、そのため十二支が配当されている。



日光・月光菩薩像



十二神将（子～巳）



十二神将（午～亥）

黄幡神社の絵馬 (美術工芸品)

奉納絵馬 (有形民俗文化財)

町指定	平成8年4月5日 (黄幡神社)
	昭和52年8月29日 (奉納絵馬)
所在地	正木2434番地 (黄幡神社)
	御荘平城3063番地 (奉納絵馬)
	(愛南町教育委員会) (奉納絵馬)

黄幡神社絵馬は、正木地区黄幡神社に奉納されている武者絵の大絵馬で、構図から衣川の合戦の源義家と思われる。額は縦1m横1.5mで右上部に「安政五年戊午九月吉日」とあり、右下部に「からびおかすけのじょう 巖岡助之丞」左に「当村□□□」と記されている。

巖島神社絵馬 (奉納絵馬) は、御荘湾にある大島の巖島神社に奉納されていたもので、内海浦全漁民の氏神である巖島神社の祭礼に島の周りをめぐる船の様子か、または新造船の船おろしを描いたものと思われる。額は、もみいた 縦54cm横1.95mで右に「とき 于時安政五年戊午極月吉辰」とあり、左に「あじろ ゆいで 網代浦結出網施主浦和盛次兵衛」と記されている。

奉納の由来は不明であるが、安政5年(1858)8月に宇和島領内でコレラが蔓延し、10日間で死者1,640人、総患者数4,500人という事態がおこっている。両絵馬が安政5年9月と12月に奉納されていることから、蔓延したコレラの終息を祈願し、奉納したのではないかと考えられる。



黄幡神社の絵馬



奉納絵馬

網代開拓由来記（典籍）

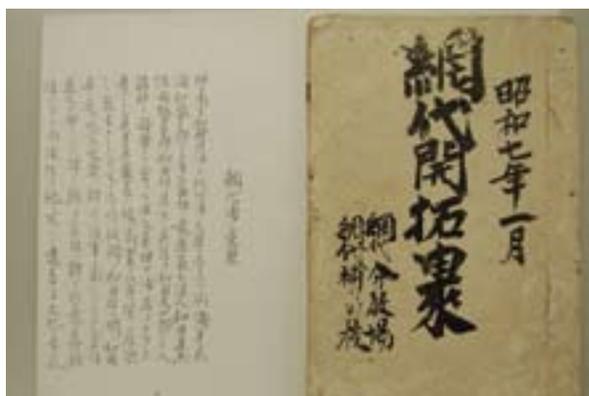
町指定 昭和60年2月21日

所在地 柏497番地（内海公民館）

浦和家を中心に網代地区の開拓の歴史をつづったものである。

由来記によると、浦和家の祖先が高知県幡多地方から魚神山に移住し、文化5年（1808）当主儀左衛門は同志20人を募り、網代の開拓にのりだしている。しかし45歳で亡くなると、事業が頓挫し同志も離散、生活は困窮する。その後、儀左衛門の子萬蔵は成長して父の意思を継ぎ、漁業に着目し漁を開始する。技術の向上により漁獲高も増え、これに伴い自然に人口も増加する。しかし天保4年（1833）2月15・16日の大火により、ほとんどの財産を失ったものの、萬蔵の奔走により離散を阻止し、集落の回復のため山を切り開き、鳥獣の駆除に尽力し、遂に網代の開拓に成功する。弘化4年（1847）その功績により姓を名のることを許可され、浦和盛次兵衛（後年平内と改名）と名のった。盛次兵衛は新しい敷網の存在をしり、研究に取り組む。後、子浦和盛三郎が家業を継ぎ山野を開墾し集落を広げ、父が研究した漁法を改良し「金輪網」を開発、ますます漁業に勤しみ巨万の富を築く。

この「網代開拓由来」記は明治26年9月16日に書かれたものである。昭和7年には網代分教場網代補習校（青年学校）の教科書としても利用されており、歴代の網代区長により地区の重要書類として代々引き継がれてきたものである。



28ページ町指定有形文化財「浦和家の棟札」と関連

城辺町内出土考古資料（考古資料）

町指定 昭和57年12月3日

所在地 御荘菊川3721番地3

町内で発見された出土品は多いが、その中で、出土地点の明確なもので、考古資料として確認できる次のものを、埋蔵文化財として指定している。

1. 緑当時出土石器（縄文草創期）

尖頭状石器で、旧石器時代より縄文期に移った頃の1万5千年前のもので、県下でも数少ない石器である。

2. 梶郷駄場出土石器（旧石器）

旧石器時代の瀬戸内式ナイフ形石器である。

3. 天巖の鼻出土土器（縄文後期）

布目文土器で、布目は1cmにタテ糸16本、ヨコ糸12本で織物と間違えるほどの編物で、現在日本で知られている縄文期のもので最も密度の高いものである。

4. 不老池出土土器（弥生）

5. 愛宕山出土土器（弥生）

高地性遺跡ではないかといわれる地より出土したものである。



不老池出土土器



緑当時出土石器

城辺小学校出土石器（考古資料）

町指定 昭和39年 9月10日

所在地 城辺小学校

城辺小学校の校庭、南西の隅、地下2mから出土した石器で、磨製の大型石斧^{せきひ}14.8cmと打製の円形石器7.8cmである。

石斧は土を掘るか、木を切るのに使ったと思われ、円形の石器は動物の皮をはいたり、ものを切るのに用いたものと思われる。

約2000年前の弥生時代のものだとされている。



浦和家の棟札（歴史資料）

町指定 昭和60年 2月21日

所在地 柏497番地（内海公民館）

この棟札は檜板で、魚類製造家屋（松風）の建築にあたり、明治23年3月に作られたもので縦154cm、横34.5cm及び厚さ1.3cmである。

これには、魚は獲るだけではだめで、製造に力を入れなければ水産業の発展はありえないという日本国や日本水産業界の進路を示し、また当時世界一の海事国といわれていたイギリスと、同じ島国である日本に大きな違いがあるのは、考え方や努力が足りないところに原因があるといった見解を示している。最後に、自分の意思を引き継ぎ、後世の人々に日本水産業界の発展のため立派に事を成し遂げてほしいという浦和盛^{せいざぶろう}三郎の切なる願いが書かれている。



26ページ町指定有形文化財「網代開拓由来記」と関連

尾崎藤兵衛尉資料（歴史資料）

町指定 昭和40年 4月17日

所在地 御荘平城

永禄・元亀・天正時代、御庄は比叡山の天台寺院の支配下にあり、その代官谷氏、ついで土佐一条の家司、町氏（かじゅじ勸修寺）が領主となり御庄殿と呼ばれていた頃、その領主に仕えた一人に尾崎藤兵衛尉政儀とうべえじょうまさよしがいた。『河野分限録』には、「御庄領主、かじゅじ勸修寺左馬頭さまのかみもとのり基詮。本城（常盤城）、大森、緑、猿越の四ヶ所城主。より寄騎衆、上岡玄蕃きしゅう允知光、満倉加賀守、尾崎藤兵衛尉の三騎。御庄寄合三十騎」とある。

その藤兵衛は、御庄殿の枝城の新城（高知県宿毛市宇須々木）をあくまでいたといわれている。天正3年（1575）8月7日新城の戦いで、長宗我部の将、近藤三河守を討取り、小島右近を生け捕りにするなど戦功をたてたといわれ、一条家の執政、源康政より感状をもらっている。

尾崎藤兵衛尉への感状、扶持状や尾崎家代々目録、藤兵衛尉使用（伝）の十文字槍などが保存されている。



樽見英明学校印（歴史資料）

町指定 昭和51年11月3日
所在地 御荘平城3063番地
(愛南町教育委員会蔵)

明治6年に発足した樽見英明学校の校印である。材は桜で、縦・横各6cm、高さ3cmである。明治5年に発布された学制によって創設された学校で、現在も残っている唯一の校印である。

当時の学校の修業年限は4年間で、1級から8級までに分かれ、各級それぞれ6ヵ月で進級するというもので、成績優秀なものは、その期間を待たずに進級することができた。種別は下等科で、学級編成は単級（全校1学級）、教科目は主として読み方、書き方、算術を修学した。

当時、樽見部落は船越部落から分かれて、部落づくりに励んだ苦難の時代であったにもかかわらず、いち早く学校を造った。その先見性と苦勞をしのび大切に保存してきたものである。



篠山絵図（歴史資料）

町指定 平成19年7月21日
所在地 増田5466番地
(一本松郷土資料館蔵)

篠山を中心にした着色大絵図で、「元禄二年」(1689)と別筆のある張り紙がある。寛政2年(1790)からの、土佐藩と宇和島藩の篠山国境争いの際作られた篠山山形模型との関連があると思われる。

山形模型は、模型中心の山頂部を約3倍に拡大して作られているが、この絵図も中心部を広く描いているようである。また建物・地名・主要部を朱書きしているところも同様である。

ただ、正木村の川向こうが、絵図では窪川邑(村)となっているのに対し、山形模型では、江戸期に窪川邑から改名した山北(村)になっているという違いがある。

制作年代の確認はできないが、江戸前期を下らぬ絵図、あるいはその写しとみて間違いのないと思われる。



奉 納 歌 額

町指定 昭和45年7月14日

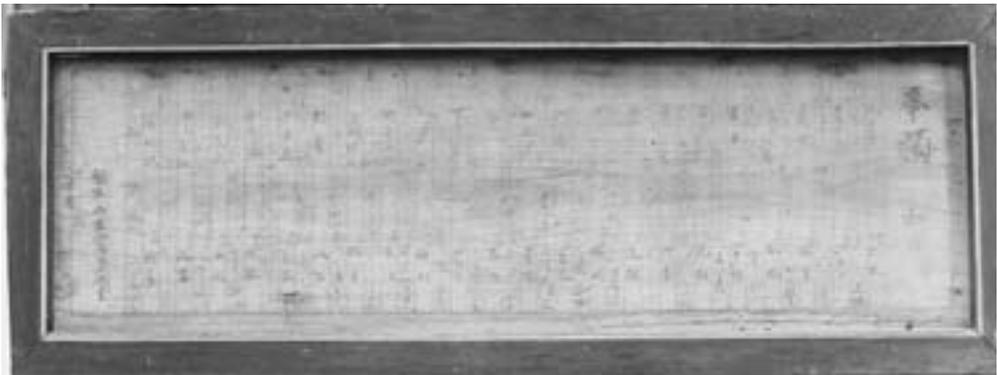
所在地 御莊平城1531番地

この額は、八幡神社に奉納された縦79cm横2.12m、松の一枚板の歌額である。「願主、二宮^{じよすい}如水藤原綱重」とある。如水とは御莊三歌人の一人で、深浦にあった外海浦庄屋で、通称は市右衛門といい如水というのは号で、いここにあたる二宮敬作（如山）とのつながりがあるといわれる。

額の奉納の年月日は不詳であるが、彼が歌に親しんだのは30歳前後とされ、その師は、本居^{もとおりおおひら}大平の弟子、宍戸^{ししど}大瀧^{おおたき}である。大瀧は深浦の番所に赴任しているところから、その影響を受けて歌の道に入ったと思われる。

歌数22首で作者11人となっている。読人には綱重をはじめ、岡原^{つねよし}常備、重基^{しげもと}、小西^{やすつぐ}泰次、尾崎^{まさなえ}政苗、宍戸^{ひろつぐ}広嗣、柿島^{つねとし}恒利、上原^{はるかぜ}春風、大和田みち子らが記されている。

綱重は明治になって姓を小幡に改め、広見村の庄屋もつとめている。



御荘焼資料（有形民俗文化財）

御荘焼長月窯跡（史跡）

御荘焼一木窯跡（有形民俗文化財）

御荘焼早崎窯跡（有形民俗文化財）

御荘焼豊田窯跡（有形民俗文化財）



一木窯跡

町指定	平成8年5月14日	（御荘焼資料）
	昭和45年7月14日	（御荘焼長月窯跡）
	昭和39年9月10日	（御荘焼一木窯跡）
	昭和39年9月10日	（御荘焼早崎窯跡）
	昭和39年9月10日	（御荘焼豊田窯跡）
所在地	御荘菊川3721番地3	（御荘焼資料）
	御荘長月1265番地	（御荘焼長月窯跡）
	緑乙1571番地	（御荘焼一木窯跡）
	緑乙1928番地	（御荘焼早崎窯跡）
	城辺甲5006番地	（御荘焼豊田窯跡）

御荘焼の創始者とされる紋之介^{もんすけ}（寛政2年～万延2年）については、生地その他不明であるが、いずれかの地で陶磁器についての知識を身につけていたと思われる。文化8年（1811）に長月庄屋と陶石の採掘願を藩庁に出したという記録が残っている。天保6年（1835）には息子の久治兵衛（文政3年～明治33年）を藩命により久谷で修行させ、天保9年（1838）から長月で本格的な磁器の生産を始めた。この長月窯を開いたあと御荘焼の窯は緑一木窯、緑岡窯（後に早崎窯ともいう）、豊田窯（シャカダバ窯ともいう）へと移転していく。

長月窯は確認された御荘焼最初の窯で、陶片からみると、あらゆる日用雑器が焼かれていたことが分かる。この窯を廃止し、緑に移った理由は諸説あるが、産出される陶石の質の悪さと、水の便がよくないことが大きな要因ではないかと思われる。

緑一木窯の陶片は非常に少なく、短期間で岡窯に移ったのではないかと思われる。一木窯と岡窯の製品は、形・絵付け等が非常に似かよっているのが特徴である。

その後、緑一木窯は衰退するものの、明治に入って再び窯を興し、昭和初期まで角切角鉢^{すみきりかくばち}や雑器類を焼いている。

安政3年（1856）久治兵衛30歳の時には、緑岡に窯を興し、僧都産の陶石や

釉^{うわぐすり}用のユス灰を使用し作陶した。この岡窯は昭和初期の廃業まで最も長い期間営まれ、大量の焼き物が作られた。期間の長さや量の豊富さから、御荘焼を代表する窯といえる。

豊田窯は、富岡喜内^{きない}（明治に入り久治兵衛が改名）と甥の稲田峰三郎^{みねさぶろう}によって築かれた窯で、御荘焼の窯としては最後に築かれたものである。この窯で焼かれた製品の特徴は、明治初頭に輸入されるようになったコバルトを用いた絵付けと印判物である。また色絵付けも焼かれ、富岡喜内と稲田峰三郎の名から「富岡」の窯印のある良品が作られた。



御荘焼長月窯跡



長月窯の製品と陶磁片



緑岡窯の製品と陶磁片



緑一木窯の製品と陶磁片



豊田窯の製品と陶磁片

54ページ町指定史跡「御荘焼陶祖久治兵衛の墓」と関連

和口若宮神社金幣

町指定 平成11年10月8日
所在地 御荘平城3063番地
(愛南町教育委員会)

「金幣」の名称は「宇和旧記」が初出であり、^{そうこんぶつ ぐ ぼん}荘嚴仏具の幡の変形とみられ、神仏習合により神前に供せられたとの説もあるが、むしろ神に捧げる^{ごへい}御幣の一種とみて、後に神霊の依り代^{よしろ}（御正体）や装飾となったとみるべきであろう。

和口若宮神社の金幣は、銅板製で、上部山形の部分は2枚合せ、縦17cm横15cm、柄を中心に6条に1.8cmの銅板片を7面に折り曲げ、4片を銅環で継ぎ、先に4.6cm角の銅板を斜に継ぎ、先端に銅鈴を付けてある。

柄は2.7cm角の木造で漆塗り、^{うるしぬ}七宝文を全面に入れた銅板で一部外装してある。破損して長さは48cmしか残ってないが、90cm位はあったであろう。

上部山形の片面に「宝永五歳願主中尾彦七、若宮大明神、^ね子ノ九月十八日和口村中」と^{いんこく}陰刻がある。

宝永五歳（1708）願主中尾彦七は和口村庄屋與右衛光良である。類似のものに僧都若宮神社の宝永3年（1706）のものの中ノ川弁天堂のものがある。県指定のものには、西予市宇和町三島神社の永禄12年（1569）のものがある。



チョウナづくりの家

町指定 昭和50年12月5日

所在地 緑丙4196番地1

柱を全部、手斧で削った、一室住居型の典型的な民家である。正面を除き、すべて大壁で塗りこみ、居室の床を低く、自然石の上に横木を乗せて、その上に板を張るという古い手法が用いられており、18世紀を下らぬ民家である。

民家（農家）には、19世紀後は田の字型、それ以前は3間取型の1列並型の2系統があるが、その文化前の型として、庶民住宅の移り変わりを知る上で、貴重な資料となっており、建造物としても重文級の価値があるといわれている。

現在は、移築保存事業に伴い、山出憩いの里温泉敷地内に移築一般公開されている。



遍路版木

(遍路図・八十八箇所本尊図・尊師伝承図・十三仏図・庚申図・七夕図・守札)

町指定 平成19年7月21日

所在地 増田5466番地

(一本松郷土資料館蔵)

八十八ヵ所番外札所篠山の前札、広見の札掛近くの田中家にあったもので、全7枚が一本松郷土資料館蔵となっている。

1. 遍路図版木

この版木は、河川が多く、第40番札所観自在寺より第41番札所龍光寺に至る3本の街道のうち灘道なだ（柏坂越）を太く主要道としていることから、江戸末期の作と考えられる。

2. 八十八箇所本尊図版木

3. 尊師伝承図版木

弘法大師と（右）衛門三郎

4. 十三仏図版木

5. 庚申図版木

6. 七夕図版木

織姫と牽牛けんぎゅう

7. 守札版木



尊師伝承図版木



八十八箇所本尊図版木



庚申図版木



十三仏図版木

これらは、遍路みやげとして売られていたもので、中でも遍路図版木は、全国でも現存するのはわずかに3点（3ヵ所）で、すべて愛南町にあり、大変貴重な資料である。



七夕図版木



守札版木



遍路図版木

一本松郷土資料館の版本



八十八箇所本尊図

七夕図



尊師伝承図



遍路図

城辺中組の唐獅子 家串の荒獅子 城辺下組の唐獅子

町指定 昭和63年7月5日
(城辺中組・城辺下組)
昭和39年11月1日(家串)
所在地 城辺中組地区(城辺中組)
家串地区(家串)
城辺下組地区(城辺下組)

獅子舞は伎楽・舞楽として大陸から来たものである。南予の唐獅子は2人立ちであり、城辺中組のものは伝承不明であるが、一般的な太(代)神楽(伊勢派)である。始めに天狗(猿田彦)による「そもそも、この唐獅子と申すものは神宮大天照大神宮、天竺より渡らせ給う、さるによって大神宮、ご寵愛遊ばされ、日の本の悪魔祓えと清めたてまつる、氏子中五穀成就、富貴繁昌給い候らえ。」という由来語りがあ

る。一方家串の荒獅子は、鼻先で飛び回る蝶(テガイ子=太鼓打ち)を捕まえようと起き上がった獅子が、逆に蝶に翻弄され、荒れ狂うさまを表現したもので、太鼓を打つ少年が蝶であり、端を二つに垂らすように紫の鉢巻を締め、たすきの端を蝶結びにして、蝶を表している。

城辺下組の唐獅子も、荒獅子とも呼ばれるもので、家串の荒獅子同様、蝶(テガイ子=太鼓打ち)に誘われて寝獅子が起きあがり踊りだすものである。

この唐獅子は、昭和18年頃幡多郡大月町竜ヶ迫から城辺に教えに行ったと土佐の記録に残っており、また竜ヶ迫のものは内海家串の人に習い、家串の荒獅子は土佐中村から伝えられたという言い伝えが残っているところからも、家串のものと城辺下組のものが似かよっていても不思議ではない。



城辺中組の唐獅子



家串の荒獅子



城辺下組の唐獅子

貝塚五ツ鹿踊り

鹿踊り（久良・鮎越の六つ鹿）

城边上組八鹿踊り

町指定	昭和40年4月17日	(貝塚)
	昭和57年12月3日	(久良・鮎越)
	平成16年9月30日	(城边上組)
所在地	貝塚地区	(貝塚)
	久良地区	(久良)
	鮎越地区	(鮎越)
	城边上組地区	(城边上組)

鹿舞い（ししまい）は、南予一円、旧宇和島、吉田両藩に伝わっているもので、宇和島藩初代藩主伊達秀宗を慰めるため、奥州の鹿踊りを踊って見せたものが始まりという。

事実、仙台近くの鹿踊りに歌詞の共通性がみられ、伊達氏入部とほぼ同じ頃に移入されたものであろう。（最近鹿舞いのルーツは、宮城県の川前鹿踊りであろうとされている。）

歌詞、旋律は地区ごとに少しずつ違いが認められるが、踊りは少年が胸に縮太鼓しめだいをつけ、鹿の面をかぶり丸くなって踊る。

貝塚地区の鹿踊りは、10～12歳位の男子5人で構成される五ツ鹿である。鹿の面を頭に着け、胸には縮太鼓、きらびやかな衣装をまとって「回れ、回れ水車…」と唄いながら踊るものである。

口にすすきの穂をくわえた一頭の雌鹿が踊りの中心となり、四頭の牡鹿とともに舞い踊る。昔はムシロ1枚の中で踊ったともいわれるこの鹿舞いの特徴は、御荘地域内6組の鹿舞いのなかで一番動きが激しく、俗に飛鹿とびししと呼ばれている。

久良地区の鹿踊りは、男子6人で構成される六つ鹿である。貝塚五ツ鹿踊りとほぼ同じであるが、牡鹿が5人で構成されているのが特徴である。

城边上組の鹿踊りは、近年保存会を立上げ、会員の尽力により途絶えていた鹿踊りを復活させたものであり、8人で構成する八鹿の形態をとる。

どの地区のものもススキ原に隠れた雌鹿を牡鹿が尋ねる情景が含まれているのは共通である。

いずれも11月3日の秋祭りに踊られる。



貝塚五ツ鹿踊り



鹿踊り



城边上組八鹿踊り

僧都の伊勢踊り

町指定 昭和57年12月3日

所在地 僧都地区

伊勢踊りの起源は古く、700年程前の弘安の役（元の2回目の襲来）の後であらうといわれている。

戦国時代は中絶したが、江戸初期に再び流行して、慶長19年（1614）四国に入り、東から順次流行、土佐幡多地方から宇和島藩内に入った。ほとんどの村で踊られていたが、現在残っているのは数地区に過ぎない。

僧都の伊勢踊りは享保の頃、僧都の法印上岡瑞照ほういんかみおかずいしょうが伊勢から習ってきて教えたとの伝承が残っている。

しかし、歌詞や踊りからみて、やはり幡多地方から入ったものと思われる。

踊りは、その年、身内に死人のない男の子に限られ、6人が女の子のように化粧をして、古くから伝わる麻の長袖を着て、扇と幣を持ち、太鼓・縦笛・鼓の調子に合わせた伊勢踊りの歌で踊る。

戦前は旧11月卯の日に踊っていたが、現在は新暦11月3日に若宮神社で踊っている。

踊りの前に三番叟さんぼそうがあるが、これは本来別々であったものが、一緒になったものと思われる。この三番叟は、鈴を使わず、拍子木で床を打ち調子をとる、古い様式が残っている。



俵ねり

町指定 昭和57年12月3日
所在地 緑地区

毎月11月3日の秋祭りに、緑で行われている「ねり」の一つである。

古くから青年たちによって受け継がれてきたもので、現在は中学生によって行われている。

黒い半天を着て、俵、じょうご、ます、斗かき棒などの農事に関係のある道具、それにそろばんを持ち、「ハイーシ、ハイーシ、ヒヤマカセノ、シ、ハランダー」との掛け声（意味は分からない）で、道具を肩に上げ、下げする簡単な動作の「ねり」である。

起源や、いわれは分からないが、道具にそろばんのあるところからみても、藩政期の年貢納めに関連したものであることは想像される。

全国的にみても他に類例のない珍しいものである。



中・外泊の祝唄

町指定 平成15年1月21日
所在地 中泊・外泊地区

祝唄には、「舟唄^{ふなうた}」と「石舂き唄^か」があり、舟唄は中泊の名家吉田家5代目当主喜三兵衛（文化5年没）の時代、旧正月2日の乗り初めに、網子達に舟唄として唄わせたのがはじまりと伝えられ、現在も船おろしや落成式等めでたい席で唄われている。石舂き唄は、婚礼が新郎の自宅で行われていた当時、仲人が新郎を連れて行く途中、村人は新婦を見るため柴垣^{しばがき}で道中を止め「誉め言葉」と「お礼」のやりとりを繰り返し、柴垣を除き通行させ、新郎の家にとどり着く。婚礼の儀が滞りなくすむと、若衆の石舂き唄が始まり、二つの石を重ね終えると、新郎新婦の「誉め言葉」となり、夜遅くまで宴が催される。

祝唄は、伊勢音頭・地狂言^{じきょうげん}等の流れをくむものと思われる。現在、花嫁道中の風習は廃れたが、石舂き唄は現在も結婚式で唄われ、祝唄保存会により、保存継承されている。



福 浦 三 番 叟

町指定 平成15年 1月21日

所在地 福浦地区

福浦の^{さんばそう}三番叟は、いつ、誰がつくったのか定かでないが、伝承では150年以上といわれている。

三番叟には豊作や豊漁祈願の目的があり、上方から歌舞伎役者を呼んで演じてきたものである。それが地元に着し、神社の祭礼では欠かすことのできないものとなったといわれている。

地狂言における三番叟は、奉納の舞台を清める意味があり必ず最初に踊られる。もともと福浦地区は^{じきょうげん}地狂言が盛んなところで、年月が経過し地狂言が廃れ、三番叟のみがその意味合いから残ったものと考えられる。

4人の子供と拍子木打ちの大人1人で演じられ、1ヵ月前から練習を重ね、11月3日の秋祭りに備える。当日氏神様は、神輿に乗り、里におりてこれ、地区住民と一緒に終日過ごされ、夕方神社にお帰りになられる時に、今年の豊漁・豊作の感謝と、翌年の豊漁・豊作祈願をこめ、神社に帰るご神体（氏神）に、心をこめて舞を奉納したのがはじまりであるといわれている。



深 泥 遺 跡

町指定 昭和45年7月14日

所在地 御荘深泥18番地外

深泥遺跡は、御荘湾の南岸から突出した海岸段丘上にあり、面積約1.5ha、高さ10mの段丘中央部から高さ5m位までの先端部に向け、遺物の散布が集中している。その採集の遺物からみて旧石器から縄文時代の貴重な遺跡である。この遺跡発見のきっかけは、大分県姫島産の黒曜石片や矢じりが採集されたことにある。

約1万5千年前といわれる瀬戸内式国府型ナイフ形石器や四国でも少ない船野型細石核を出土している。また、約8千年前の早期の格子目押型文土器や姫島産のこぶし大の黒曜石の原石などが発見され、この場所が長期にわたって利用されていたことを証明している。



細石核

和口西の駄場遺跡

町指定 平成2年7月12日

所在地 御荘和口1938番地外

この遺跡は旧石器時代の西南四国最大の遺跡で、和口地区西の駄場という、ゆるやかな台地上に広がる遺跡で、早くから横剥ぎの翼状剥片や瀬戸内式国府型ナイフ形石器など、多くの瀬戸内技法関連資料が発見されていた。

これらの旧石器が数百点発見されたことから、岡山大学考古学研究室が、平成元年に試掘調査を実施した。

試掘溝から出土したものは、すべて剥片であり、石材は頁岩である。これまでに採集された瀬戸内技法を含む石器群や堆積する火山灰層をもつことなどから、四国西南部における重要な遺跡である。



ナイフ形石器

梶郷駄場遺跡

町指定 昭和57年12月3日

所在地 緑甲1697番地外

梶郷駄場からルヴァロア型（亀の甲型）の旧石器らしいものが採取され、新聞に報道され注目された。大久保ダムの通用路予定地のため昭和51年7月、愛媛県教育委員会が発掘調査をした結果、縄文前期前半の遺跡と判明した。

調査報告書によると、旧石器ルヴァロア型に似た石器を含む層からは、縄文前期の中津川式1、2類の土器が共に出て約6000年前の遺跡であると確認された。

この遺跡からは、多様な石材の石鏃^{せきぞく}、石斧^{せきふ}及び石核^{せっかく}にくわえ土器片も多量に出た。

また、瀬戸内式ナイフ形の旧石器も出土している。



天嶼の鼻遺跡

町指定 昭和39年9月10日

所在地 久良4471番地

天嶼^{てんぎ}の鼻遺跡は、高野長英築造の台場跡、南側下の池の谷から土器が出土した。縄文前期から後期にかけてのものが確認されているので、5～6千年の間、断続的ではあろうが、人々が生活していたのではないかと考えられる。

後世、畑として耕作してきたため、土器は細分し完全なものはないが、珍しいものとして、内側に布目の文様のある土器片がある。これは布目文土器といい、この遺跡で出土したものは、日本で最も細かい布目のもので、県下でも発見例の少ない縄文後期の土器である。

この遺跡は、南東は太平洋に面し、後ろに山をひかえ、山海の幸に恵まれ、温暖で水の確保が可能であるという点から、人が生活するのに最適な土地だったのではないかと考えられる。



天嶼の鼻遺跡は石垣の内

八幡神社遺跡

町指定 昭和44年7月11日
所在地 御荘平城1534番地1外

はちまんじんじや
八幡神社遺跡は、昭和37年5月に発見された。縄文晩期のものと思われる土器片や黒曜石の矢じりなどの遺物は、境内西寄りの古木の根本や畑の付近から出土している。

対岸には海をへだててみどろ深泥遺跡があり、せんぼな仙礫鼻、ぼせ馬瀬、みつさき節崎と東に向かい点々と遺跡が続いている。八幡神社遺跡とこれらの遺跡群との位置関係から人々の交流も考えられる遺跡である。



法華寺遺跡

町指定 昭和35年5月7日

所在地 御荘平城2829番地1外

法華寺遺跡は、標高40mのなだらかな南向きの丘陵地で、平城平野を一望できる小高い丘にあり、もと山王社（日枝神社）があった跡に、昭和7年建立された法華寺の敷地に存在する。

この遺跡は、昭和初年ごろから調査研究がなされていたが、昭和34年の調査により、多くの石器や弥生式土器などが発見されている。また、弥生前期の完全な形の土器も出土している。

資料のなかには、弥生前期から後期におよぶ土師器の破片などがあり、縄文晩期に属する土器片なども見られることから、これらに関連する複合遺跡であることが分かる。



法華寺出土土器

節 崎 遺 跡

町指定 昭和44年7月11日
所在地 御荘平城4964番地外

^{ふっさき}節崎遺跡は、昭和37年の調査によって、縄文時代および弥生時代の遺跡であると確認された。

遺跡は、登尾池北側付近に位置し、出土遺物は、姫島産黒曜石片や矢じりなどの石器類が多数をしめ、その他に弥生式土器の小片や須恵器も出土している。

僧都川河口に近いこの遺跡は、深くいりくんだ御荘湾と遠浅の干潟をひかえ、魚介類の豊富な海からの安定した食料の確保がたやすく、恵まれた生活の場であったと考えられる。



三 島 岡 遺 跡

町指定 昭和39年9月10日
所在地 城辺乙808番地

^{あたこやま}愛宕山には、弥生後期の遺跡として愛宕山遺跡があり、この峰続きの舌状台地の先、三島岡にあるNHKラジオ中継塔敷地から、昭和31年多量の赤褐色でもろい土器が発見されたことにより、遺跡であることが判明した。

この遺跡は、弥生後期後半の平底や丸底の土器双方が出土しており、九州地方との関連を研究するうえで大切な遺跡である。



常 盤 城 跡
大 森 城 跡
緑 城 跡

町指定 昭和39年9月10日
(常盤城・大森城・緑城)
所在地 城辺甲2049番地(常盤城)
城辺甲1806番地(大森城)
緑乙1798番地1外(緑城)

戦国時代の御庄領主（御庄殿と呼ばれ、初めは青蓮院の坊官谷氏、後に勸修寺流の町氏）が、平城から中心の小高い山に城を築いた。これが本城（常盤城）であり、山の形から別名亀が城とも呼ばれた。（城辺という地名は、城の辺りという意味である。）

現在の諏訪神社社殿の所が本丸、諏訪公園の台地が二の丸、西側の桜園が三の丸跡である。江戸時代に川の付け替えが行われているが、当時は、南北とも城山の裾を僧都川（北）と蓮乗寺川（南）が流れており、川を天然の堀に利用した要害の地であった。

大森城は、本城守備のため、近くの大森山に築いた枝城である。天正11年（1583）他の枝城と同じ頃に落城し、城兵は本城に立てこもることになる。現在は南レク都市公園となり、当時の面影は少ないが、空堀やのろし台、土塁の跡が一部残っている。

緑城は、枝城の1つで中緑にあり、城跡は平らな山頂で空堀が1本ある。天正11年（1583）宿毛城主長宗我部右衛門大夫によって攻め落とされたという。城跡からは、堀切を通して、やはり枝城の1つである猿越城跡が見える。

崩れた崖などには、骨片が白くでてくることもあり戦のすさまじさを今に伝えている。

土佐長宗我部軍の侵攻に耐えていた御庄勢も、次々に枝城を奪われ、長野に付城を築かれ、天正12年（1584）落城した。

<御庄勧修寺氏枝城>

城辺地域…常盤城（城辺）・大森城（城辺）・今木城（城辺） 鳶ヶ巣城（古月）
数城（城辺）・大谷の砦（城辺）・烏帽子取の砦（城辺）・一夜城（長野）
風呂ノ谷城（城辺）・土居城（城辺）・土居の内（三島）・御陣山城（城辺）
太郎ヶ谷砦（城辺）・緑城（緑）・新ノ城（深浦）・垣ノ内城（垣内）
一本松地域…猿越城（増田・広見）・峠の城（正木）・むその城（正木）
宿毛市…新城（大深浦）

（参考）

<愛南町内の城跡>

内海地域…鳥首城（柏）・串ノ岡城（柏）
御荘地域…風ヶ森城（菊川）・平城（平城）・永月城（長月）
（伝説のものを含んでおり、現在確認できないものもある。）



常磐城跡



大森城跡



緑城跡

緑の千人塚

町指定 昭和39年9月10日

所在地 緑乙3269番地

緑の智恵光寺にある五輪塔群で、天正11年（1583）土佐長宗我部軍の御庄侵入による緑城の戦いの戦死者の墓を集めたものだといわれている。

また藩政期の大洪水で水死した人々の墓だという説もあるが、百姓はその当時、五輪塔は建てなかった。

五輪塔は、かこうがん花崗岩で、大きいものは117cmあり、以前は、形の不揃いのものまで入ると115基存在していたが、現在は50基程度を残すのみとなっている。

五輪塔は下から地・水・火・風・空の五大を、それぞれ四角・円形・三角・半月・団形で表し、仏教思想にもとづき、平安時代にわが国で創始されたものである。墓標とされたのは鎌倉時代からである。



芭蕉句碑

町指定 昭和58年12月9日

所在地 御荘平城2253番地1

岡村呉天は、父しょうあん松庵の指導を受けはいかい俳諧の道に入り、文化13年（1816）江戸のちぞくいっぴょう知足一瓢が発行した「さいかせん俳諧西歌仙」に名前が載っていることから、当時の著名俳人であったことが知られ、中央の俳人との交友も多かった。天保初年頃から、宇和島御荘社を起こし、地方俳人の指導をしている。

このばしょう芭蕉句碑は、「かれおばな続枯尾花」の発刊記念と自身の還暦祝い、松尾芭蕉の150

回忌とをあわせて、天保14年（1843）冬、高さ1.5mの自然石を用い、観自在寺山門横に呉天が建立したものである。

句碑には、芭蕉の「春の夜や籠人ゆかし堂の隅」という句が刻まれており、右中將藤原実愛卿筆とある。藤原実愛は、朝廷の討幕派の公家で、討幕の偽勅を書いた権中納言正親町三条実愛（後の嵯峨侯爵）のことである。呉天が、内泊に来ていた柳園（小沢）種春を通じて依頼し、書かせたものである。



岡村松軒翁之墓所

町指定 昭和58年12月9日

所在地 御莊平城2253番地1

岡村松軒（俳号は呉天）は天明3年（1783）外海浦内泊に生まれ、平城に転居し医業をはじめた。漢方医の父の手法に、蘭学の医術を取り入れ、新しい療法を行ったので、御庄一の医者として名声を高め、御庄組内の医業の革新と先進的医学の導入に努めた人である。一方、文化初年頃からは塾を開き、読み書きも教えて、この地方の文化振興につくした教育者でもある。松軒は万延元年（1860）78歳で死亡した。

松軒の墓は観自在寺境内にあり、墓石の表には「岡邑松軒之墓」と刻まれており、側面には辞世の句である「取りとめぬ世の有さまよ草の露」が彫られている。

その横には、彼の子である2代目松軒の墓碑もある。2代目松軒はコレラ治療にたずさわる中感染し、その遺骸を荼毘した山が松軒山とよばれるようになった。



初代 松軒の墓



2代目 松軒の墓

御莊三歌人岡原常嶋の墓 御莊三歌人二神永世の墓 御莊三歌人二宮如水の墓

町指定 昭和62年12月25日
(岡原・二神・二宮)
所在地 城辺甲1829番地3外 (岡原)
城辺甲3690番地1 (二神)
深浦417番地 (二宮)

岡原常嶋は、享和2年(1802)御庄総鎮守諏訪神社の神主岡原家(明治初期に中臣と改姓)に生まれ、伊予・土佐50社の神官となる。

本居宣長のりながの養子大平おおひらの門に入り和歌を学んで、同門の宍戸大滝ししど おおたきなどと交友を結んだ。

俳句もよくし、画、生花にも長じ門人も多かった。屋号を松の舎、画号を南崖と言う。書も巧みで「吉田の日記」「麻ぎぬの日記」などがある。嘉永4年(1851)50歳で病没、諡号は道足比古松蔭大人しごう みちたりひ こまつかげのうし、墓所は大森山の北麓にある。

二神永世は、寛政2年(1790)城辺村庄屋二神の分家堀舎ほりやに生まれ、佐太郎、秀平、のち重兵衛と改める。諱は綱定いみなと言う。

和漢の学に通じ書も巧みで、常嶋とは隣家で最も親しく、本居大平の門人録にも共に名を連ねている。自著に「永世歌集」がある。

嘉永7年(1854)65歳で病没、墓所は長野少林寺にある。

二宮如水は、文化8年(1811)深浦の外海浦庄屋二宮(明治以降小幡)の家に生まれる。通称市右衛門、諱は綱重、妻は二宮敬作の妹テツである。

国学、和歌を内泊にいた小沢種春や深浦番所に来た宍戸大滝に学ぶ。「金毘羅参詣の記」「嶋路日記」など紀行文が多く、歌集には「岩垣集」(上・下)がある。

明治20年(1887)76歳の高齢で没す。墓所は深浦の西光寺にある。



白妙^に尔^もて山^を埋^めそめ
春^の時^しるう^くひ春^の聲^{こえ}

如水

白妙ももて山を埋めそめ
春の時しるうくひ春の聲

小幡 如水

寄^二木祝^一

登^としこと尔^に若^葉佐^さしそ^ひ和^わ可^かゆ^れ流^る
木^たち盤^は君^か可^か千^ち代^の蔭^{かげ}可^か母^も

永世

寄の木祝
登しこと尔若葉佐しそひ和可ゆれ流
木たち盤君可千代の蔭可母

二神 永世

欲^二花散^一

三^みよし能^のや堂^たる雲^と三^みし花^も
満^ま可^かふ可^か飛^ひなく山^の風^そふ^く

常嶋

欲の花散
三よし能や堂る雲と三し花も
満可ふ可飛なく山風そふく

岡原 常嶋

御莊三歌人の短冊

御荘焼陶祖久治兵衛の墓

町指定 昭和63年7月5日

所在地 緑乙3269番地

「御荘焼」は藩政時代より御庄郷で焼かれた磁器で、窯の所在地によって長月焼、緑焼、シャカダバ（豊田）焼、また陶工の名によって久治兵衛焼、喜内焼と呼ばれていた。この御荘焼を本格的に始めたのが久治兵衛である。

久治兵衛（文政3年～明治33年）は藩命により久谷で修業し、天保9年（1838）より長月で本格的に磁器生産を始めた。その後、緑一本谷に、ついで岡に移った。この頃の作品は「久治兵衛焼」として知られている。

明治に入り、久治兵衛は富岡喜内と改名、匱の窯印はその後の彼の作品である。

後に岡窯は弟子の早崎にゆずり、甥の稲田峰三郎と共に豊田（シャカダバ）に窯を築いた。

久治兵衛の墓は、緑の智恵光寺にあり、表に「陶成軒広誉済雲全教居士」、横に「緑陶器元祖富岡喜内墓」とある。



32ページ町指定有形民俗文化財「御荘焼資料」と関連

脇本の傍示礫

町指定 昭和57年12月3日

所在地 脇本828番地付近

伊予・土佐の国境の古歌に、「篠^{やはす}矢筈、正木川分、松尾坂、もくず浜中、芦はオリノリ（地名）」とあるが、この浜中にある傍^{ぼうじ}示（境のしるし）の岩が傍^{ぼうじ}示礫である。「宇和旧記」にも、「伊予・土佐の境、傍^{ぼうじ}示ハエより沖の島のオリノリを見渡し…」とあり、さらに「岩の上には白檀^{びやくだん}の木が生えていた。」とある。

万治2年（1659）、伊予・土佐両藩の国境や漁区の争論に対する幕府の裁定書にも同様の文言がある。現在でも愛媛・高知両県の境は、この傍示礫である。

磬とは、海で使われるものと陸で使われるものがあり、双方とも、少しだけ視界の中に見え隠れする岩等のことを意味する。海は波によって見え隠れする場合を指し、陸は樹木によって見え隠れする場合を指す。(四国西南地域)



59ページ町指定名勝「脇本の浜」と関連

僧都の一里塚

町指定 昭和57年12月3日
所在地 僧都1809番地

藩政時代の一里塚跡である。

公式には、2代将軍秀忠の慶長9年(1604)から、江戸日本橋を起点に、主な街道へ1里(4km)ごとに^{りていひょう}里程標として塚を築かせ、一里塚とし、後には榎などの木を植えさせた。(残っているものは国の史跡)実際には、街道の両側に植えられるのが本来の姿である。

宇和島藩でも、第2代藩主宗利の寛文12年(1672)に、一里塚に松を植えさせた。宿毛街道(御巡検街道ともいう)の要地、僧都の一里塚に植えたのが二本松であった。

二本松は、いずれも甲乙つけがたい2本の黒松で、地上7mで二つに分かれている。東から見て、右が根回り7.5m目通り4.7m、左は根回り8.1m目通り6m、樹高は30m位、樹齢315年であった。

昭和53年、松くい虫の被害がみられ、年数回薬剤注入による防除を行ってきたが、ついに昭和62年枯死し、天然記念物を解除、伐採した。

現在は、伐採後の切り株から新たな松が成長している。



天巖の砲台場石塁

町指定 昭和62年12月25日

所在地 久良4471番地

宇和島藩が高野長英に設計させ、嘉永3年（1850）に完成した天巖の「久良砲台場」（県史跡）の施設の一部で、台場の右下の海岸にある。砲術師などの屋敷を防護するために築いたもので、高さ2.5m、長さ100m位で、ほぼ完全に残っている。久良砲台場の付随施設として台場と共に大切に保護する必要がある。

石塁内にあった屋敷は、日土（二宮家）に移し現存している。



9 ページ県指定史跡「高野長英築造の台場跡」と関連

松尾岬の境界石標

町指定 昭和51年3月26日

所在地 小山2158番地

江戸時代、土佐宿毛と伊予宇和島を結ぶ宿毛街道の国境いである松尾岬に建っている2基の石碑は「從是東土佐國」と「從是西伊豫國宇和島藩支配地」とある。

江戸時代には公式に「藩」は無く、「領」（例：宇和島伊達領）が用いられている。この伊予の境界石標には「藩」の文字があるので江戸時代に建てられたものではなく、版籍奉還後「宇和島藩」が設置され、旧領主伊達宗徳が藩知事に任じられた明治2年6月より廢藩置県が行われた明治4年7月までの間に建てられたものである。

一方、十数年前に小山で2つに折り、橋の一部に活用されていた「従是西伊豫國宇和島領」と彫られた碑が2基発見された。これが記録にある貞享4年（1687）に最初に峠に建てられた碑と、天保5年（1834）10月に建て替えられた碑である。



宇和島領碑



宇和島藩碑

古い碑2本は小山御番所近くに再建されている。碑の文字は、古いものほどのびのびと勢いがある。

なお、土佐の碑は貞享5年（1688）に建てられたものである。

小山御番所井戸

町指定 昭和51年3月26日

所在地 小山1556番地

小山御番所は、藩政時代に、宇和島藩が国境の出入を取り締まるため、土佐との要所である松尾坂の伊予側に設けた番所であり、宇和島藩の中でも特に重視され、能吏のうりが常駐していた。

明治5年の学制発布後、建物は、明治8年より心導しんどう学校として使用された。

現在、建物は残っていないが、その当時使用していた井戸のみが残っている。



長 走 り の 滝

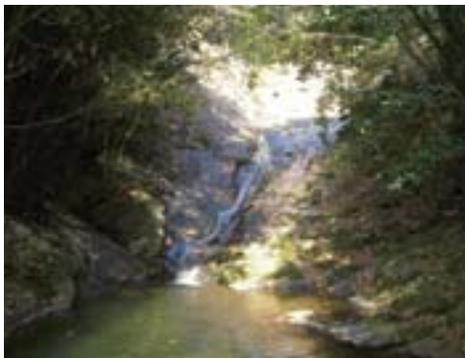
町指定 昭和61年12月25日

所在地 緑地区梶郷上

僧都川の支流大久保川（県道大久保橋脇）を200m上がった所にあり、30m位の岩床を白布を引いたように走るこの滝は、音をたてて底深い淵に流れこむ。

春は新緑が、秋には紅葉が美しく映え、夏は河鹿かじかの声を聞き、水遊びの子どもどもの歓声が溪谷にこだまする。

この滝より更に500m上がると「大久保ダム」がある。



天 巖 の 鼻

町指定 昭和61年12月25日

所在地 久良地区天巖鼻

南予十景の第一位に選ばれた「天巖の鼻」は、足摺宇和海国立公園の中の景勝地で、切り立った断崖の下には奇岩怪石きがんかいせきが乱立し、透明な海中には海のお花畑と呼ばれる造礁サンゴ類を見ることができる。

白垂の灯台もあり、展望台からの太平洋の眺めはすばらしい。

近くには高野長英設計の「砲台場」（県史跡）や「石罌」（町史跡）、それに「天巖の鼻遺跡」（町史跡）がある。



脇本の浜

町指定 昭和61年12月25日

所在地 脇本地区県境

愛媛と高知の両県にまたがる600m位の美しい砂浜で「脇本の浜」と呼ばれている。

東の方には、土佐と伊予の境として古くから知られた「傍示^{ぼうし}婆^{ばえ}」(町史跡)があり、中程には「滝之宮」がある。

滝の宮様は、戦時中、出征兵士が無事に戻ってくるようにとの願いから、履物による願掛けを行う神様として知られ、また祭りには大刀踊りや予土相撲大会で、数千人の人出で夜を徹して賑わったものである。



54ページ町指定史跡「脇本の傍示婆」と関連

篠山山頂自然林

町指定 昭和62年11月12日

所在地 篠山

山岳信仰の聖地として大切にされてきた篠山（1065m）山頂自然林は、篠山神社を中心とした13ha余りの地に自然のままの姿を残している。

蓮華の座と呼ばれる山頂一帯はミヤコザサにおおわれ、アケボノツツジの古木群落、分布上の南限として学術上貴重とされる胸高直径1mものハリモミ純林、風雪のため曲がりくねったコウヤマキの巨木、ホンシャクナゲなどが特徴的である。この他、根回り9m目通り6.5mの「大杉」や、14種類もの植物が着生した根回り5.5m目通り4.2mの「十色のコウヤマキ」などの巨樹と林床の植生は多くの動物を育み、多くの野鳥の楽園にもなっている。

アケボノツツジ（愛南町の花）



メジロ（愛南町の鳥）



篠山山頂



ハリモミ



アナグマ

火 打 石

町指定 昭和60年2月21日

所在地 油袋地区

油袋地区ゆたいのこあざ小字火打では学名チャート（chert）（放散虫・海綿などの動物の殻や骨が長い期間堆積し、岩石となったもので赤色のものが多い）がとれる。昔からチャートは「火打石」として利用されてきた。

火打石は、火打金との打撃で鉄の微粒子を削り取り、その微粒子を火花にするための発火道具である。このために、硬度4～5以上の鉄（鋼）に対して、さらに硬く鋭い稜部りょうぶが得られるものが用いられた。



チャート採掘場所

柏崎岩神社境内巨木群

町指定 昭和60年2月21日

所在地 柏崎316番地

柏崎の氏神岩神社は宝永3年（1706）11月の創建で、享保3年（1718）11月と安政5年（1858）4月に改築したと伝えられている。神社規模は小さく境内は狭いが、その境内には昔から地区住民の尊崇の木として、ウバメガシ、ホルトノキ、エノキ、モッコク、ハゼノキなど大切に保存されてきた巨木群がある。特に2本のウバメガシは目通り3mと2mのものであり、樹齢約600年といわれており、県下でも有数の大木といえる貴重なものである。その他、タイミンタチバナ、クチナシ、カクレミノ、アコウ、マサキなどが見られる。



八幡神社社叢

町指定 昭和40年4月17日

所在地 御荘平城1522番地1

八幡神社の創建は、永仁3年（1295）と伝えられるので、町内では篠山神社に次いで古い神社とされている。そのため境内一帯はすべて神域として保護され、うっそうとした樹林で覆われている。

この社叢は、暖地性の植物が生い茂り照葉樹林を形成している。大木はスタジイが多く、最大のは根回り8mで、老大木には高さ2mの板根が発達しているものもある。また、周囲6mのタブノキには、地上8mの位置からアコウが着生し、成長を続けているなど、自然の営みが確認できる。高木としては

イチイガシが、境内東側の比較的狭い範囲に多数あり、大きなものは周囲2.5mをこえるものが数本あり、高さは30mである。

他には、ハナガガシ、チシャノキ、ケヤキなどの大木も見られる。植物相は高木、低木及び草本類と三段階となっている。



老 大 木 柏 槇

町指定 昭和40年4月17日
所在地 御荘平城3500番地

ビャクシンは、本州・四国・九州に広く分布するヒノキ科の常緑高木から大型低木である。雌雄異株で、葉は短く茎に密着し、互いによりあって葉の付いた枝は棒状の外見を持つ。海岸の岩場などに生育し、大木になると、幹がねじれたようになるのが特徴である。

永ノ岡の金光寺境内、庫裏くろりの南側にあり、根回り6m目通り5.3m、樹幹は地上2.5mのところに分かれ、二幹となっている。それぞれの幹の周囲は4mと3.5mで、地上7mまで立ち上がり、そこから枝を傘のように四方に広げている。

樹高は約16m、樹勢よく樹冠の広がり東西約17m、南北18mである。樹齢は約500年と推定され、金光寺が開基の頃に植えられたものと伝えられている。



アコウの大木

町指定 昭和40年4月17日

所在地 御荘平山517番地

アコウは、クワ科の常緑高木で、紀伊半島以南の暖地に自生する。幹の直径は1 mに達し、周囲に気根を出す。葉は大きな長楕円形で、春に落葉してただちに新しい葉をつける。雌雄異株。春にイチジクに似た花をつける。

平山地区にある天神社の境内に自生するものは、急斜面に生えているものの、地上に露出する根はあまり高くなく、この木が種子から芽生えた場所が平地に近かったことを物語っている。

町内の海岸線の近くには、アコウの木が点々と自生しているが、樹齡の少ないものが多く、特に大きいのは、この木と八幡野中尾家のものだけである。

県下では、伊方町三崎（旧三崎町）のアコウが北限とされ、国指定となっている。



蘇 鉄

町指定 昭和58年12月9日

所在地 御荘和口2501番地

ソテツは、九州南部から南の海岸断崖や急斜面に多く自生しているが、町内に自生は見られない。常緑の低木で雌雄異株、観賞用として学校や寺院、墓地などに植えられることが多い。またソテツという名の由来は、枯れそうになった時に、幹に鉄釘を打ち込むと蘇生するということに由来する。

和口の中尾家にあるソテツは雄株で大きな株立ちになっている。幹の本数は10本以上、株の周囲約6 mという大きなものである。最大のものは幹の周囲2.1 m高さ4 m、上部で15本に枝わかれしており、枝先までの全長約6 mである。樹齢は約250年と伝えられている。

平成2年に家の建替えに伴って、現在地に移植された。



赤松家の南天 御荘室手の大南天

町指定 昭和51年3月26日（赤松家）
平成11年10月8日（御荘）
所在地 小山1485番地1（赤松家）
御荘菊川3721番地3（御荘）

ナンテンは、メギ科の常緑低木で、本州中部以南の暖地に自生する。葉は羽状複葉で、先のとがった楕円形の堅い小葉からなり、6月頃白い小花を円錐状につける。果実は球形で赤く熟す「南天実」という生薬で、干してせきどめ薬にする。また音が「難を転ずる」に通ずることから縁起の良い木とされ、その意味合いから、庭園の鬼門（北東）に植えることが多い。

この赤松家のナンテンは、約100本の株立ちで、太い幹は周囲15cmくらいある。定かではないが、樹齢百数十年といわれており、群生の枝張りは東西6m南北6m、高さ4mある。

また室手のナンテンは、1株で約200本、株の周囲6m高さ4mあり、樹齢約200年といわれている。最大のものは根回り20cm目通り15cmで、10cm以上のものが12本ある。



赤松家の南天



御荘室手の南天

観音ツバキ

町指定 昭和54年6月16日

所在地 緑丙43番地

ヤブツバキは野生のツバキで海岸や山地に自生し、春、赤い5弁花を咲かせる。広く本州以南に分布する。

古くから修験信仰の山として知られた、山出地区^{かんのんもり}観音森登り道の三合目、川田家の庭にあるツバキで根回り4.2m、8本に分かれ、幹の大きいものは目通り2.5mもあり、1m以上のものも3本ある。

この観音ツバキの特徴として、多くの花をつけ実はできるが、椿油は採れないという。

樹齢500年を越え、根回りでは県下一のツバキの大木である。

阿波蜂須賀^{はちすか}の家臣だった川田家24代前の先祖が、守本尊^{まもりほんぞん}の観音像を、このツバキの元に^{まつ}祀ったという伝説がある。



能山様の大イチョウ

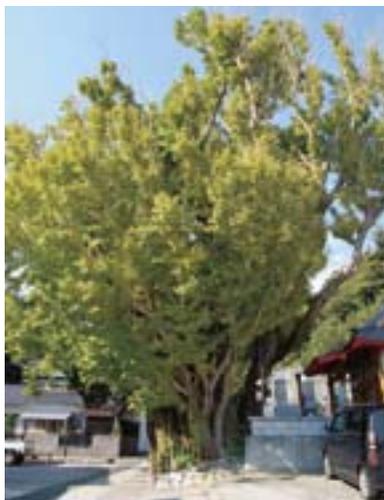
町指定 昭和39年9月10日

所在地 久良1446番地

イチョウは、イチョウ科の裸子植物で1科1種、落葉高木で高さ約30mに達する。葉は扇形で中央に裂け目があり、秋に黄葉する。雌雄異株。種子は銀杏^{ぎんなん}とよばれ食用となる。また幹や枝から気根を垂らすことがあり、乳^{ちち}の木ともいう。中国の原産で、盆栽や街路樹に多用され、材は碁盤・将棋盤などに使われる。

この木は能山公^{まつ}を祀った久良の古木庵^{こぼくあん}にあり、根回りが10mあり、地上1mで扇のように5本に分かれ、樹高は20m位で雌木である。

この木は、戦国時代の御庄領主^{かじゅじ}、勸修寺^{もとかた}基賢^{のうざんこう}（号能山公）が、居城^{ときわじょう}の常盤城を土佐長宗我部軍に攻め落とされて久良に逃れた時、ついていた杖を差したのが根づいたものだ、という伝説がある。



久良の大クス 戸たてずの楠

町指定	昭和39年9月10日	(久良)
	昭和51年3月26日	(正木)
所在地	久良2059番地	(久良)
	正木1463番地	(正木)

クスノキは、クスノキ科の常緑高木で暖地に自生し、高さ約20mにもなる長命木である。葉は卵形で表面につやがあり、5月頃、黄白色の小花を密生し、熟すと黒色になる実をつける。幹や枝葉より樟脳しょうのうをとり、防虫剤や医薬品等に用いられる。

久良の大クスは、久良の若宮神社の境内にあり、根回り8.3m目通り6.6m、樹高20m位、樹齢600年以上というクスの大木である。

同地内に指定外ではあるが、目通り4.5mと3.2mのものがある。

この境内には、ユス（イスノキ）の目通り2mのもの、1.5mのものが5本もある。

また、チカラシバ（ナギ）の大木も数本ある。他にも珍しい木が多く、大切に保存したい社叢しゃそうの一つである。

正木にある二本のクスの大木は「戸たてずの楠」と呼ばれ、旧正木村庄屋蔵岡家の庭にあり、幹の周囲はいずれも8m、樹齢推定700年といわれ、樹相の美しさは県下に数多くないといわれている。

篠山権現の神霊が最初この木に飛来したとされ、蔵岡家はその神霊の加護によって代々富み栄えたという伝説がある。これにより、戸たてずの庄屋の名はクスの大木と共に有名になった。



久良の大クス



戸たてずの楠

岩水のオガタマノキ

町指定 平成元年5月11日

所在地 岩水1373番地1

オガタマノキは、モクレン科の常緑高木で暖地に自生する。葉は倒卵状楕円形でやや肉厚の革質、表面には強い光沢がある。2～4月にかけて芳香の強い直径3cmの帯黄白色の花を、枝の先端近くの葉の付け根の上側につける。通常樹高は10～15mの高木であるが、樹齢数百年を経た木には20m以上に達するものも少なくない。和名は神道思想の招霊(おぎたま)から転化したものといわれ、神霊を招く樹ということで、「招霊樹」と名付けられ神木とされる。

岩水のオガタマノキは、「かしこき谷」にあり、根回り3m目通り3mあり、二本立ちになっている。

樹高は20m余り、樹齢200年以上とみられ、県下最大のオガタマノキである。

またオガタマノキは、珍蝶ミカドアゲハ(幼虫)の食草としても知られている。ミカドアゲハは熱帯系の美しい、個体数の少ない蝶であり、チョウ目としては唯一、高知市のミカドアゲハ及びその生息地(3箇所)が国の特別天然記念物に指定されている。



イヌマキ

町指定 平成8年4月5日

所在地 正木329番地

イヌマキは、マキ科の常緑高木。関東以南の山地に自生し、高さは約25mに達する。葉は扁平な線形または披針形^{ひしん}で密生し、雌雄異株である。庭園に植栽し、材は建築材などに用いる。この名は昔、杉をマキといたので、それと区分してイヌマキと呼んだものという。

このイヌマキは根回り3.7m目通り3.3mで、愛媛県指定天然記念物である「万福寺のイヌマキ」に比べると小ぶりではあるものの、重要な木として地域の人々に大切に守られている。



ヤマモミジ

町指定 平成8年4月5日

所在地 正木313番地

ヤマモミジは、カエデ科の落葉高木で、本州中部以北の山地に自生する。葉は手のひら状に七～九つに裂けていて、縁にぎざぎざがあり、秋に紅葉する。花は春に咲き、紅色をしている。

この木は、地元住民にヤマモミジとして親しまれているもので、根回り3.8m目通り3.5mあり地上約3mのところ5本に分枝し、樹勢もよい。見事な枝張り^{えだばり}と体軀の美しさから町内を代表する木である。

紅葉の時期には、周囲の常緑樹の中で一際赤く映え、すばらしい景観を形成

している。

しかしヤマモミジの自生は、県下で確認されておらず、イロハモミジではないかとの説があり、今後詳細調査を実施する必要がある。



ウバメガシ叢林

町指定 昭和51年11月3日

所在地 麦ヶ浦2番地付近

ウバメガシは、ブナ科の常緑小高木で、暖地の海岸近くの山中に自生する。葉は長楕円形で堅く、5月頃雄花と雌花をつける。材は備長炭^{びんちようたん}の原料になる。

当地方に群生しているもので、昔から漁具や家庭用具としてその硬質が巧みに利用され、本町を代表する樹木であり、愛南町の町の木に指定されている。

当該叢林はよく保存されており、樹齢は最大のもので450年から500年といわれ、根回り2.7mである。

町内のウバメガシ群生の代表的なものである。



文化財件数

区 分		国指定	国選択	国登録	県指定	町指定	計
有形文化財	建 造 物			4		1	5
	石 造 美 術					6	6
	彫 刻				1	4	5
	工 芸 品					2	2
	美 術 工 芸 品					5	5
	典 籍					1	1
	考 古 資 料					2	2
	歴 史 資 料					4	4
民俗文化財	有形民俗文化財					15	15
	無形民俗文化財		1		3	11	15
記念物	史 跡				2	24	26
	名 勝				1	3	4
	天 然 記 念 物	1			3	17	21
合 計		1	1	4	10	95	111

愛南町文化財指定一覧表（項目順）

1. 国指定文化財

No.	種 類	名 称	指定年月日	所 在 地
1	記 念 物	特別天然記念物 ニホンカワウソ	S.40.5.12	愛媛県・高知県

2. 国選択無形民俗文化財

No.	名 称	選択年月日	所 在 地
2	南予地方の牛の角突き習俗	H 7.11.8	愛媛県南部

3. 国登録有形文化財

No.	種 類	名 称	登録年月日	所 在 地	
3	有形文化財	建造物	井村家住宅	H.15.3.18	小山153
4			蔵岡家住宅主屋	H.15.3.18	正木1465
5			蔵岡家住宅長屋門	H.15.3.18	正木1465
6			蔵岡家住宅土蔵	H.15.3.18	正木1465

4. 県指定文化財

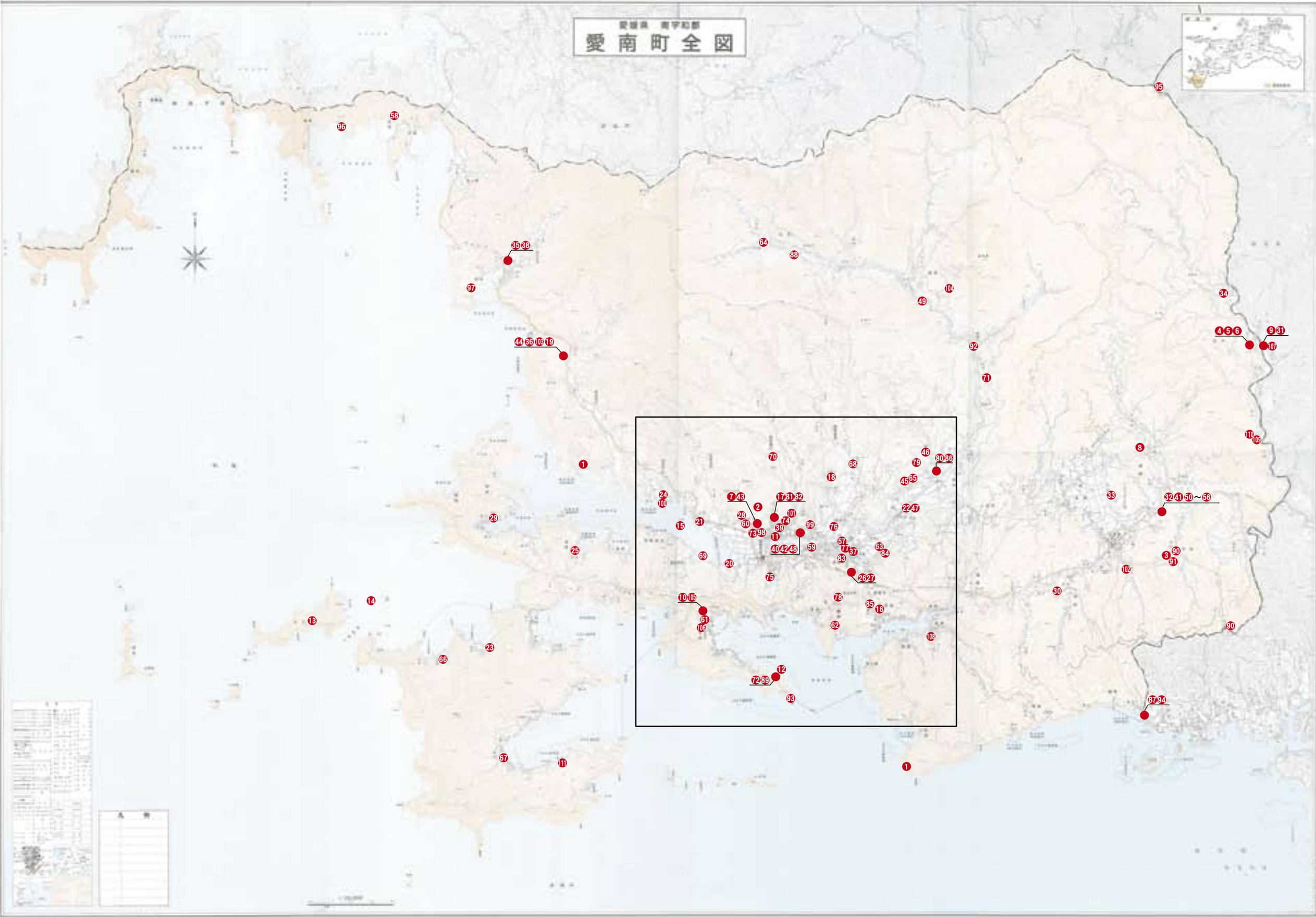
No.	種 類	名 称	指定年月日	所 在 地	
7	有形文化財	彫 刻	銅造誕生釈迦仏立像	S.40.3.29	御荘平城1531
8	民俗文化財	無形民俗文化財	はなとりおどり	S.40.4.2	増田2648
9			正木の花とり踊り	H.12.4.18	正木1468外
10			久良の能山踊り	H.17.12.27	久良1446
11	記 念 物	史 跡	平城貝塚	S.26.11.27	御荘平城2069-1外
12			高野長英築造の台場跡	S.25.10.10	久良4477外
13		名 勝	鹿島	S.30.11.4	鹿島1外
14		天然記念物	宇和海特殊海中資源群	S.40.4.2	愛南町外
15			大島の樹林	S.32.12.14	御荘平山1796-1外
16			万福寺のイヌマキ	S.59.1.10	深浦385

5. 町指定文化財

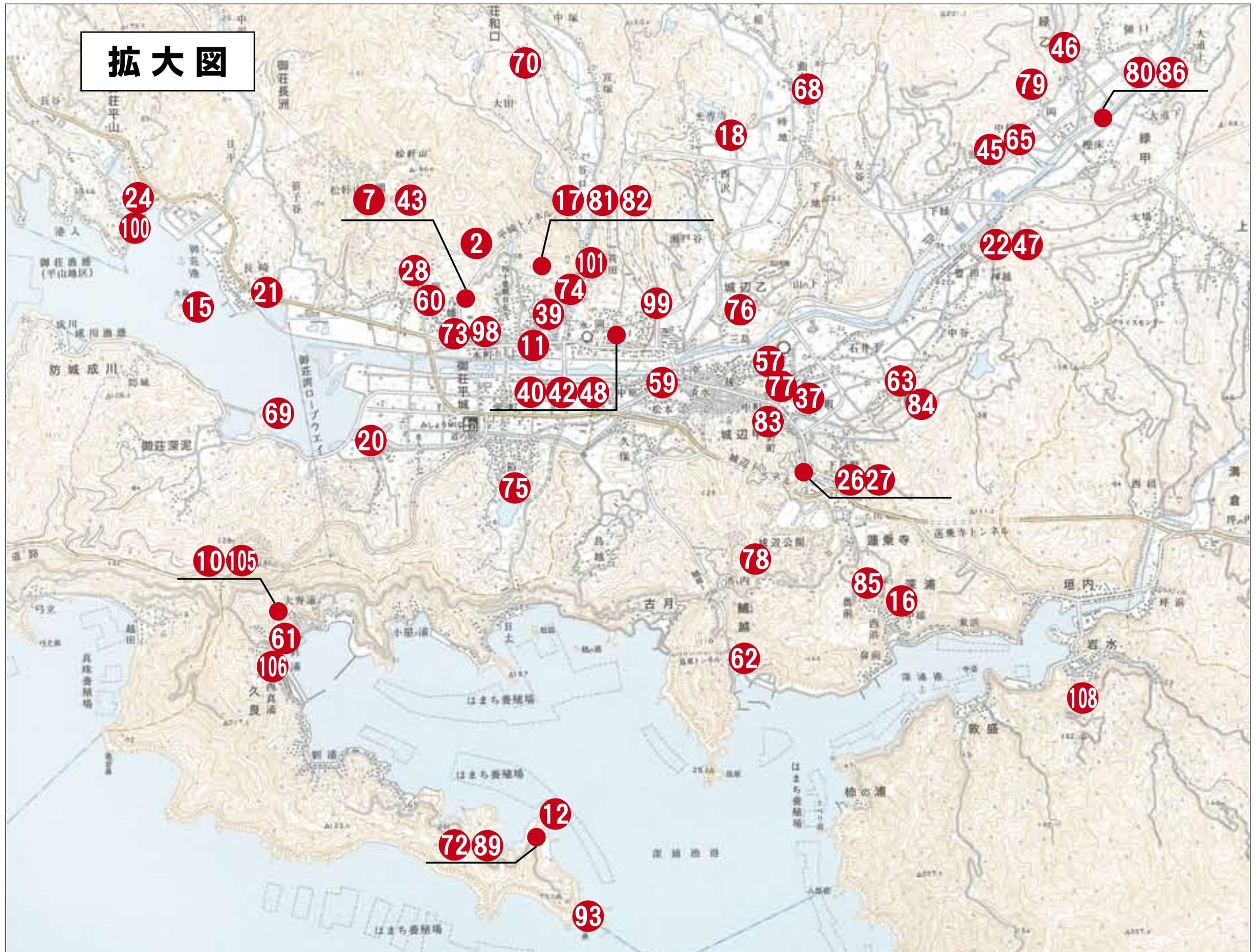
No.	種 類	名 称	指定年月日	所 在 地
17	有形文化財	建 造 物	観自在寺山門	S.51.10.1 御莊平成2253-1
18		石 造 美 術	安住寺五輪塔	S.45.7.14 御莊長月3026
19			菊川石灯笼	S.58.12.9 御莊菊川1107-1付近
20			馬瀬常夜燈	S.58.12.9 御莊平成5540
21			長崎常夜燈	S.58.12.9 御莊平成700-3
22			豊田石造物群	H.16.9.30 城辺甲5005-1
23			飛揚鯨之塚	S.51.11.3 内泊1192
24			彫 刻	延命寺地藏菩薩像
25		地藏庵地藏菩薩像		S.40.4.17 高畑495
26		黒仏 (阿弥陀如来像)		S.39.9.10 蓮乗寺44
27		黒仏 (観世音菩薩像)		S.39.9.10 蓮乗寺44
28		工 芸 品	十一面観音菩薩像	S.44.7.11 御莊平成1153
29			若宮神社狛犬一对	S.56.5.26 中浦1565
30		美 術 工 芸 品	常宝寺十一面観音立像	S.51.3.26 中川1716
31			予州篠山観世音寺鱒口	S.51.3.26 正木1468
32			有栖川宮熾仁親王染筆	S.51.3.26 一本松郷土資料館蔵
33			日光、月光菩薩像並びに十二神将像	H.3.3.26 広見2466
34			黄幡神社の絵馬	H.8.4.5 正木2434
35			典 籍	網代開拓由来記
36		考 古 資 料	城辺町内出土考古資料	S.57.12.3 御莊菊川13721-3
37			城辺小学校出土石器	S.39.9.10 城辺小学校
38		歴 史 資 料	浦和家の棟札	S.60.2.21 内海公民館
39			尾崎藤兵衛尉資料	S.40.4.17 御莊平成
40	樽見英明学校印		S.51.11.3 愛南町教育委員会蔵	
41	篠山絵図		H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
42	有形民俗文化財		奉納絵馬	S.52.8.29 愛南町教育委員会
43		奉納歌額	S.45.7.14 御莊平成1531	
44		御莊焼資料	H.8.5.14 御莊菊川13721-3	
45		御莊焼一木窯跡	S.39.9.10 緑乙1571	
46		御莊焼早崎窯跡	S.39.9.10 緑乙1928	
47		御莊焼豊田窯跡	S.39.9.10 城辺甲5006	
48		和口若宮神社金幣	H.11.10.8 愛南町教育委員会	
49		チョウナづくりの家	S.50.12.5 緑丙4196-1	
50		遍路版木 (遍路図)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
51		遍路版木 (八十八箇所本尊図)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
52		遍路版木 (尊師伝承図)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
53		遍路版木 (十三仏図)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
54		遍路版木 (庚申図)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
55		遍路版木 (七夕図)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
56		遍路版木 (守札)	H.19.7.21 一本松郷土資料館蔵	
57		無形民俗文化財	城辺中組の唐獅子	S.63.7.5 城辺中組地区
58			家串の荒獅子	S.39.11.1 家串地区
59			城辺下組の唐獅子	S.63.7.5 城辺下組地区
60			貝塚五ツ鹿踊り	S.40.4.17 貝塚地区
61			鹿踊り (久良の六つ鹿)	S.57.12.3 久良地区
62	鹿踊り (鯛越の六つ鹿)		S.57.12.3 鯛越地区	
63	城辺上組八鹿踊り		H.16.9.30 城辺上組地区	

No.	種 類	名 称	指定年月日	所 在 地	
64	民俗文化財	無形民俗文化財	僧都の伊勢踊り	S.57.12.3 僧都地区	
65			俵ねり	S.57.12.3 緑地区	
66			中・外泊の祝唄	H.15.1.21 中泊・外泊地区	
67			福浦三番叟	H.15.1.21 福浦地区	
68	記念物	史 跡	御荘焼長月窯跡	S.45.7.14 御荘長月1265	
69			深泥遺跡	S.45.7.14 御荘深泥18外	
70			和口西の駄場遺跡	H.2.7.12 御荘和口1938外	
71			梶郷駄場遺跡	S.57.12.3 緑甲1697外	
72			天嶼の鼻遺跡	S.39.9.10 久良4471	
73			八幡神社遺跡	S.44.7.11 御荘平城1534-1外	
74			法華寺遺跡	S.35.5.7 御荘平城2829-1外	
75			節崎遺跡	S.44.7.11 御荘平城4964外	
76			三島岡遺跡	S.39.9.10 城辺乙808	
77			常盤城跡	S.39.9.10 城辺甲2049	
78			大森城跡	S.39.9.10 城辺甲1806	
79			緑城跡	S.39.9.10 緑乙1798-1外	
80			緑の千人塚	S.39.9.10 緑乙3269	
81			芭蕉句碑	S.58.12.9 御荘平城2253-1	
82			岡村松軒翁之墓所	S.58.12.9 御荘平城2253-1	
83			御荘三歌人岡原常嶋の墓	S.62.12.25 城辺甲1829-3外	
84			御荘三歌人二神永世の墓	S.62.12.25 城辺甲3690-1	
85			御荘三歌人二宮如水の墓	S.62.12.25 深浦417	
86			御荘焼陶祖久治兵衛の墓	S.63.7.5 緑乙3269	
87			脇本の傍示碁	S.57.12.3 脇本828付近	
88			僧都の一里塚	S.57.12.3 僧都1809	
89			天嶼の砲台場石塁	S.62.12.25 久良4471	
90			松尾峠の境界石標	S.51.3.26 小山2158	
91			小山御番所井戸	S.51.3.26 小山1556	
92			名 勝	長走りの滝	S.61.12.25 緑地区梶郷上
93				天嶼の鼻	S.61.12.25 久良地区天嶼鼻
94				脇本の浜	S.61.12.25 脇本地区県境
95			天然記念物	篠山山頂自然林	S.62.11.12 篠山
96				火打石	S.60.2.21 油袋地区
97				柏崎岩神社境内巨木群	S.60.2.21 柏崎316
98				八幡神社社叢	S.40.4.17 御荘平城1522-1
99				老大木柏楨	S.40.4.17 御荘平城3500
100				アコウの大木	S.40.4.17 御荘平山517
101				蘇鉄	S.58.12.9 御荘和口2501
102	赤松家の南天	S.51.3.26 小山1485-1			
103	御荘室手の大南天	H.11.10.8 御荘菊川3721-3			
104	観音ツバキ	S.54.6.16 緑丙43			
105	能山様の大イチョウ	S.39.9.10 久良1446			
106	久良の大クス	S.39.9.10 久良2059			
107	戸たてずの楠	S.51.3.26 正木1463			
108	岩水のおガタマノキ	H.1.5.11 岩水1373-1			
109	イヌマキ	H.8.4.5 正木329			
110	ヤマモミジ	H.8.4.5 正木313			
111	ウバメガン叢林	S.51.11.3 麦ヶ浦2付近			

愛南町 町界図
愛南町 町界図



拡大図



あ と が き

町村合併にともない、旧町村指定の文化財は愛南町指定文化財として継承し、現在国指定天然記念物をはじめ111件を指定するに至っています。

文化財冊子もしくは資料として、内海では平成8年度に「内海見聞録」を、御荘は平成16年度に「御荘の文化財」を、城辺は平成3年度に「城辺町の文化財」を、一本松は平成4年度に「いっぼんまつの文化財」を、西海は「西海町文化財資料」を平成5年度に作製しており、古いものでは作製から十数年が経過しております。

今回「愛南町の文化財」の発刊にあたり、旧町村の文化財をまとめただけでなく、文化財の追補や新しい研究成果による訂正を行い、写真を差し替え、新町にふさわしい冊子を目指しました。

これからも貴重で身近な文化財を守っていくため、この「愛南町の文化財」が役立つことを願っています。

愛南町文化財保護審議会

委員長 久保克己

愛南町文化財保護審議会委員

委員長	久保克己
副委員長	吉田弘定
委員	浅野藤吉郎
委員	藤田儲三
委員	藤原征男
委員	佐藤一恵
委員	前田充
委員	井村博康
委員	高田義隆
委員	尾崎眞珠
委員	猪野哲哉
委員	池田多美

資料提供

財団法人 宇和島伊達文化保存会

表紙題字 清家 寛大

愛南町の文化財

平成21年3月5日発行

編集	愛南町文化財保護審議会
編集委員	久保 克己 吉田 弘定 藤田 儲三 高田 義隆 前田 充
編集事務局	藤本 吉信
発行	愛南町教育委員会 愛媛県南宇和郡愛南町御荘平城3063番地 TEL0895-73-1111(代)
印刷	佐川印刷株式会社

引用、コピー自由